

第Ⅳ章 億首川流域古墓群比嘉原地区

第1節 億首川流域古墓群の概要

川幅が狭く、古来、陸上交通・海上輸送上の拠点地である通称「ウククビ(奥首)」一帯から下流域の台地及び丘陵の崖面・斜面地に分布する。従前の予備調査で複数の墓群を認めており、確認した墓は計25基を数える(平成22年12月現在)。当該地域には「ナグスク(宮城)」「ミーチェ」の古称をもつ小字宮城原・田慶志原の台地崖面一帯の墓域*をはじめ、まだ相当数の古墓が分布・残存していると推測される(図4.1)。

予備調査では当該地域周辺に分布する各墓群を包括的に捉えて「億首川流域古墓群」と名付けるとともに、将来の追加も予想されることから、所在地の小字・ハル(原)単位で地区を設定し、「小字名のアルファベット頭文字+連番」方式で古墓分布状況の実態把握に努めている所である。

今回、記録保存対象とした墓群は、小字比嘉原・

宇武場原に跨る小丘陵の斜面地一帯において石灰岩岩盤露頭部の岩陰を利用した、岩陰墓を主体とする墓計8基(H-01～08号墓)である。次節以下、墓ごとに遺構詳細や出土遺物を記述していく。



写真 4.1 発掘調査区近景

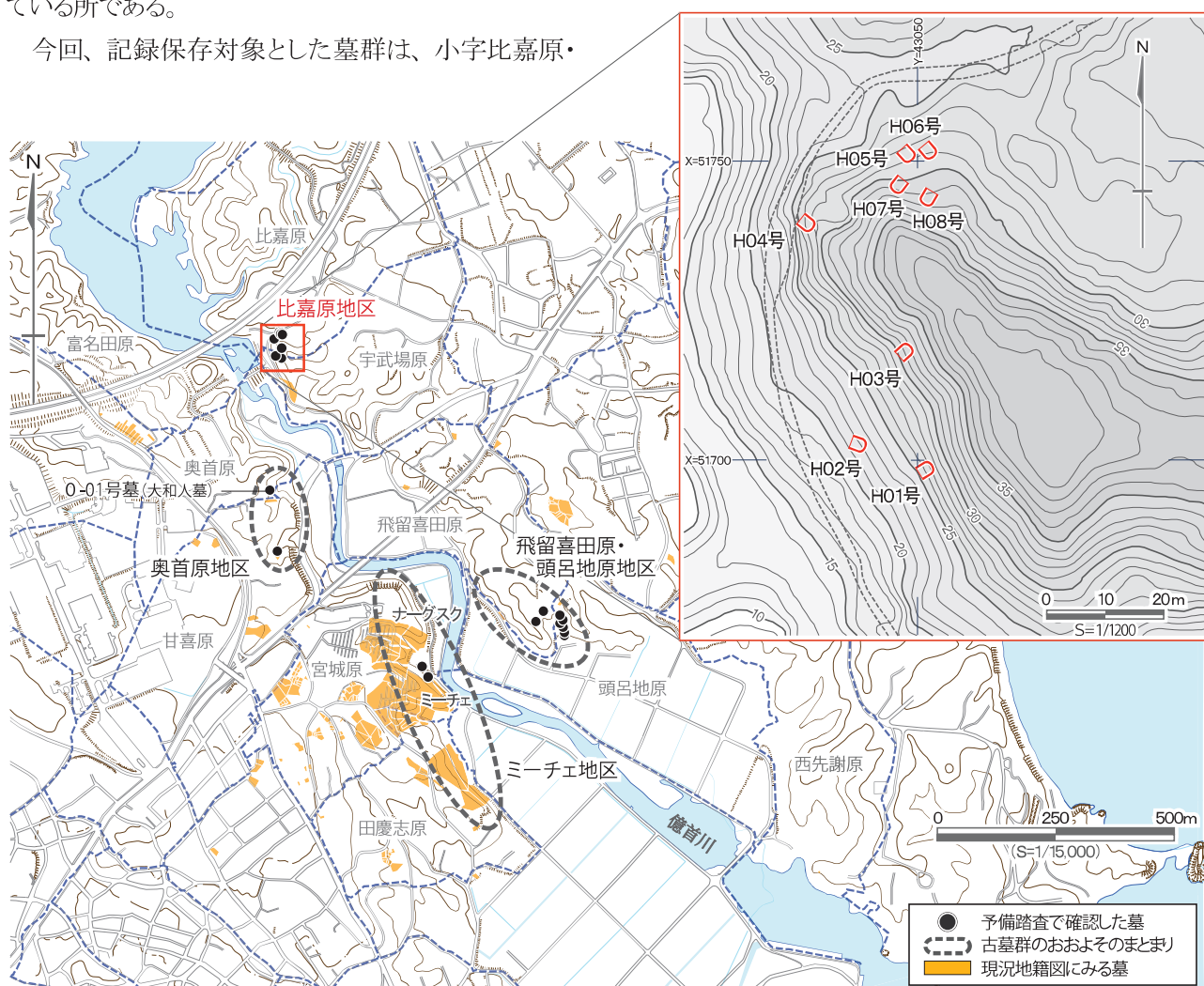


図 4.1 億首川流域古墓群分布状況及び今回調査区

*『金武町誌』や地元区誌資料中に該地域における墓域に関する記述がみられる。(『金武区誌 戦前編』1983年、『並里区誌 戦前編』1998年)

第2節 H-01号墓

2.1. 遺構詳細 丘陵斜面地の切り立つ石灰岩岩盤崖面にある岩陰を利用した墓である。確認時点で墓口は開けられ、周辺に蔵骨器等の陶器破片が周辺に散見する状況から既に移転された空墓である事が容易に窺えた。以下、墓の諸特徴を表4.1に整理する。

表4.1 H-01号墓 遺構観察一覧

位置情報		座標 X: 51697.79 Y: 43051.26 標高 H: 25.52
構築箇所の立地		丘陵斜面中腹
墓口の向き		南西
墓の形態(分類)		岩陰墓
墓の構造	規模	墓口 幅: 0.4 高さ: 0.6 奥行: ー 墓室 幅: 1.6 高さ: 0.8 奥行: 0.8 平面観: 長方形状
	特徴	岩陰前面に屋根及び墓口周辺の石積を構築する事で墓室空間を確保。
	構成材	自然の石灰岩礫、モルタル、コンクリート材(既製部材の二次利用とみられる)。
	構築手法	岩盤岩陰内の土砂を除去後、岩陰前面部に野面積みの石積で墓口周辺及び側壁を構築。 構築した石積と岩陰に一際大きなサイズの石灰岩礫(岩塊)を載せて屋根を造る。
	墓口	閉塞石をはめ込む形態ではない。閉塞石は、板状のコンクリート材を使用。踏査時点では墓口を開けた後置かれた状況。墓口部の床には2枚の扁平な石材が埋置される。
	屋根・天井	石灰岩岩盤とその前方部に構築した石積壁に石灰岩岩塊を掛けた構造。 屋根構築後にモルタルを塗布し、石積の表面を平滑に整える。
	床	露頭する石灰岩岩盤。墓室内の2箇所で方形状に掘削した痕跡を確認。蔵骨器の安置箇所と推定。
墓庭		ー
埋葬人骨の有無		なし
出土遺物	墓室内	なし
	墓室外	沖縄産無釉陶器(水甕)、本土産近現代磁器(湯呑茶碗)、米国硬貨(1セント)、金属製品(用途不明: 現代製品?)
備考		



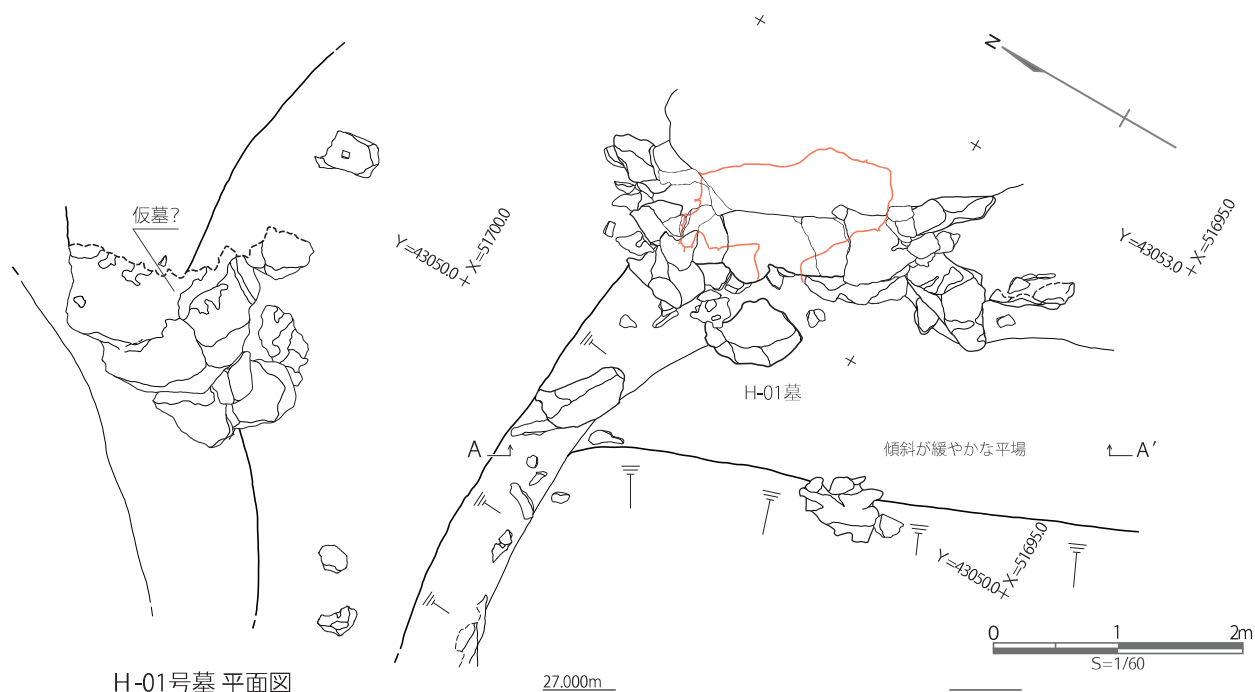
写真 4.2 H-01号墓現況（予備調査時）



069 墓周辺精査作業風景
071 墓室内側壁の石積

070 墓検出状況
072 墓室内完掘状況（室内の手前中央に方形状の掘削坑がみえる）

写真 4.3 H-01号墓



H-01号墓 平面図

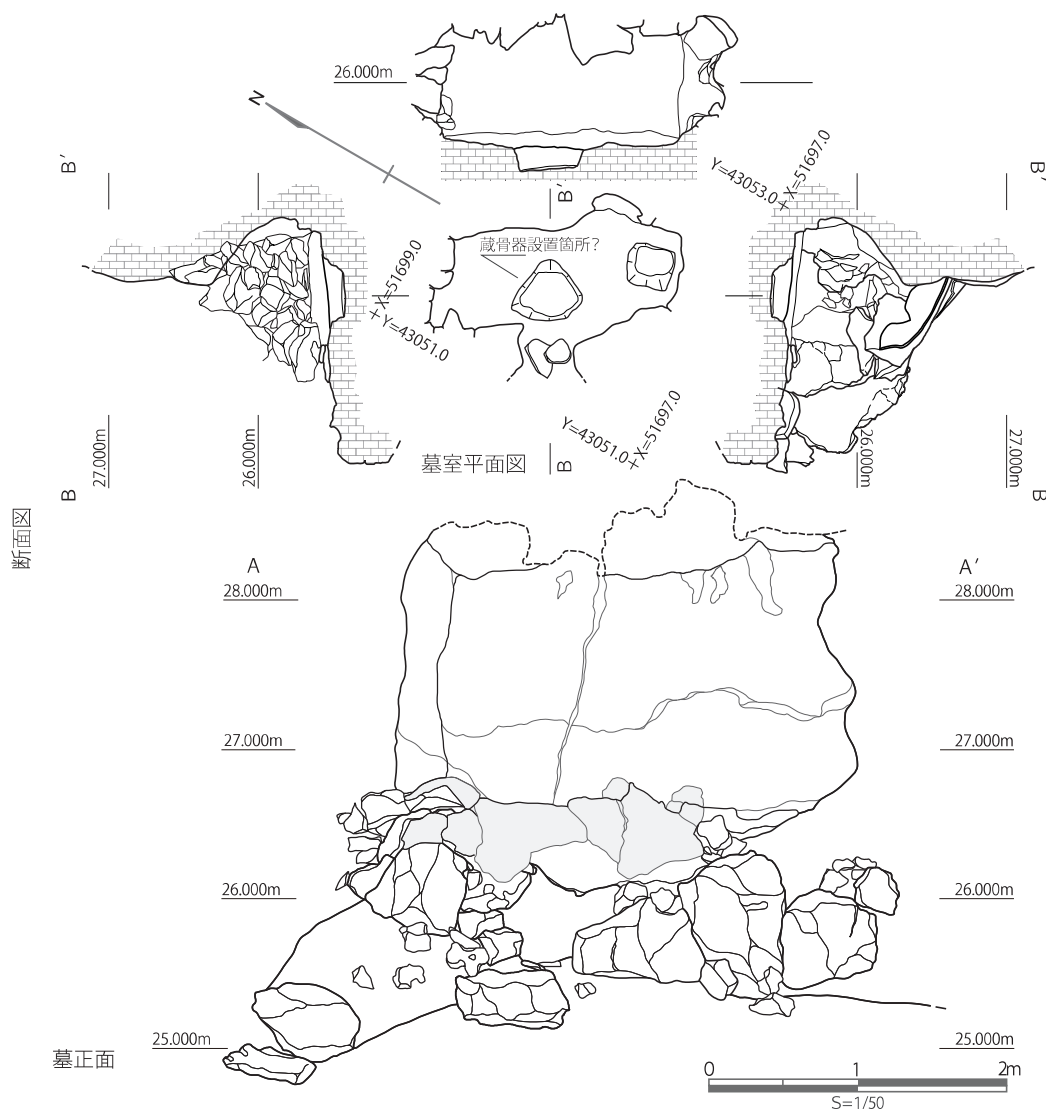


図 4.2 H-01 号墓 (平面図・断面図)

2.2. 出土遺物 01号墓前面の斜面、墓よりやや離れた箇所では沖縄産無釉陶器や本土産磁器等の遺物散布を認めた。なお、墓室内で遺物は得ていない。墓移転時に破棄されたと推測される蔵骨器の類は認められず、意図的に割られた水甕1点を得ている。

表 4.2 H-01号墓 出土遺物集計

遺物種類・器種		出土場所	墓室内	墓室外 表土	合計
沖縄産無釉陶器	水甕			1	1
本土産磁器	碗			5	5
金属製品	用途不詳			1	1
	1セント硬貨			1	1
合 計			0	8	8

表 4.3 H-01号墓 出土遺物観察表

図版 番号	種類	出土 地点 層	器種 部位	法量	観察所見	備考等
図 4.3 28	沖縄産 無釉陶器	H-01号墓 表面採集	甕 口縁～ 底部	口径 27.7 器高 57.2 底径 21.8	通称ハンドウグワ（水甕）。 内外面ともに鈍い赤褐色。底部のみ器壁内部が黒褐色のサンドイッチ状を呈する。 調整は削り後ナデ部分的に擦痕が残る。 底部は焼成時の歪みあり。 鏝状に屈曲外反する口縁部の下が窄まり、胴最大径は肩付近に位置する器形。 肩付近に1本の粘度帯を盛り付け（タックワサー）、頸部との間に櫛目による横位沈線・波状文を交互に施文、円盤貼付文（目）を5個配置する。	接合後の観察から打撃による破損とみられる

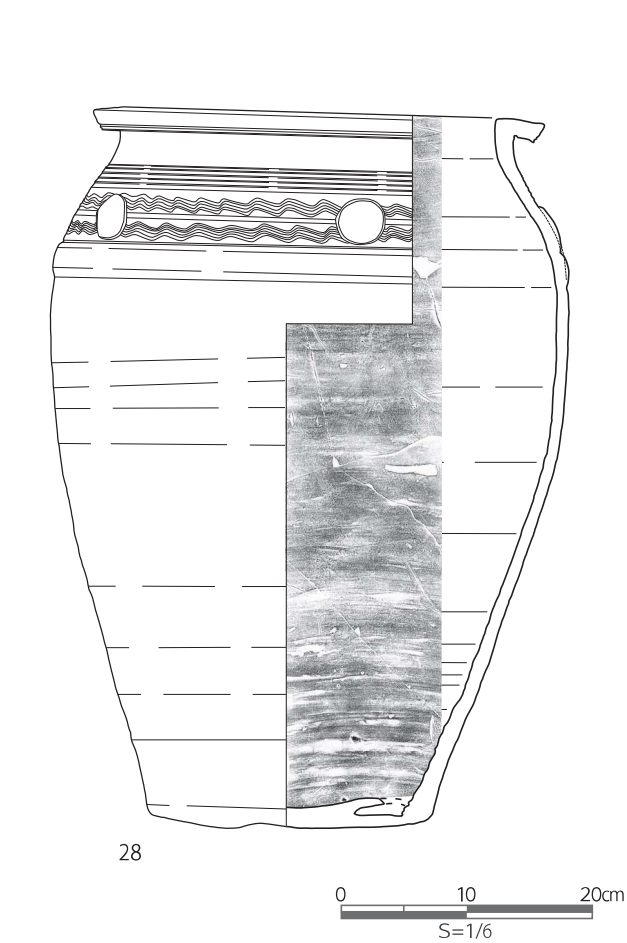


図 4.3 H -01 号墓 出土遺物



写真 4.4 H -01 号墓出土遺物集合



第3節 H -02 号墓

3.1. 遺構詳細 01号墓から北西方向に約12m、後述の03号墓から斜面の下方（南西方向）約16～17mに見下ろす位置に構築される。一見して独立で構築された墓にみえるが、墓室内を精査した結果、斜面に露頭する石灰岩岩盤の岩陰部を選択・加工した墓と認める。以下、詳細を遺構観察一覧に述べる。

表 4.4 H-02 号墓 遺構観察一覧

位置情報		座標 X：51702.06 Y：43040.00 標高 H：22.35
構築箇所の立地		丘陵斜面中腹
墓口の向き		西南西
墓の形態（分類）		一部岩陰利用のコンクリート屋根墓
墓の構造	規模	墓口 幅：― 高さ：― 奥行：― 墓室 幅：1.5 高さ：1.0 奥行：1.5 平面観：略方形状
	特徴	一見四囲が独立した墓にみえるが、斜面地露頭の石灰岩岩盤を加工・利用する。
	構成材	石灰岩礫、コンクリート材、モルタル
	構築手法	石灰岩岩盤の岩陰を断面し字状に掘削拡張後、野面積みの石積で屋根及び墓室周辺の壁を構築する。屋根は、拳大程度の石灰岩礫とサンゴ礫・貝殻が混ざる海砂を骨材に、セメントと混ぜ固化した板状のコンクリート材である。屋根と側壁の間など各部材の目地に塗り固められ、石積の隙間や凹凸部にも充填される。仕上げに屋根から側壁にかけてモルタルを塗布し表面を平滑にする。
	墓口	屋根及び前面部が損壊のため、墓口構造の詳細は不詳。
	屋根・天井	板状のコンクリート材を使用。
	床	平坦に造成後、床面全体にモルタルを塗布する。
墓庭		―
埋葬人骨の有無		なし
出土遺物	墓室内	本土産近現代磁器、金属製品、獣骨（トリ尺骨?）
	墓室外	専用蔵骨器（小型甕形）、本土産近現代磁器、沖縄産施釉陶器



写真 4.5 H -02 号墓現況（予備調査時）



075 検出状況（損壊部材を除去・精査後）
077 墓室内（墓口及び床）

写真 4.6 H-02 号墓



076 正面奥及び側壁の石積構築状況
078 墓周辺 遺物散布状況

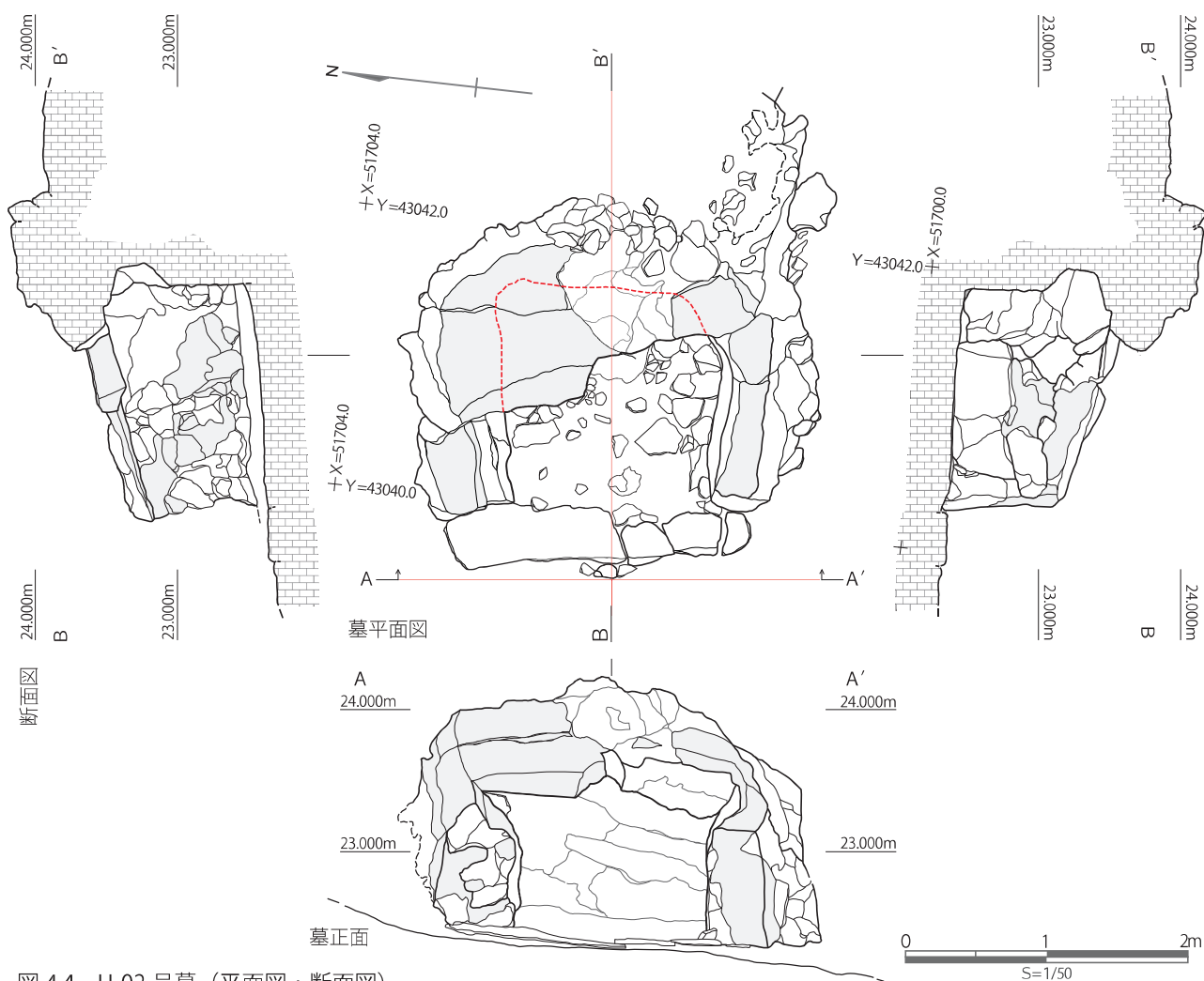


図 4.4 H-02 号墓（平面図・断面図）

3.2. 出土遺物 墓室内外より専用蔵骨器や花生等の埋葬関連品ほか各種の遺物を得ている。表面採集・表土層で得た。蔵骨器はマンガン掛小型甕形2点を得ており、墓移転時に破棄されたものと推測される。

表 4.5 H-02 号墓 出土遺物集計

遺物種類・器種	出土場所	墓室内 表土	墓室外 表土	合計
専用蔵骨器	小型甕形 / 身		2	2
	碗		1	1
本土産磁器	蓋	1		1
	器種不詳	1		1
沖縄産施釉磁器	瓶（花生）	1	1	2
金属製品	用途不詳製品	1		1
脊椎動物遺体	トリ？	1		1
合計		5	4	9



079

079 出土遺物（小破片資料を除く）

写真 4.7 H-02 号墓出土遺物集合

第4節 H-03 号墓

4.1. 遺構詳細 丘陵縁辺部の崖下、立面高約 5 m を測る切り立った石灰岩岩盤に構築された墓で、02 号墓の上方（北東方向）に位置する。今回対象の墓群では明確な墓庭を伴う唯一の例である墓自体は既に移転された空墓である。

遺構詳細を観察一覧（表 4.8）に記述する。

4.2. 出土遺物 墓室内外で本土産磁器や用途不詳の金属製品等を得たほか、墓室内では被埋葬者とみられる人骨破片数点を認めた。なお、破棄された蔵骨器類の周辺散布は認められなかった。出土遺物はすべて小破片のため、集計記録に留め図化は省略した。

表 4.6 H -02 号墓 出土遺物観察表

図版 番号	種 類	出土 地点 層	器 種 残存部位	法 量	観 察 所 見	備 考 等
図 4.5 29	沖縄産 施釉陶器	墓室外 表面採集	小杯 □～底	□径 7.9 器高 4.2 底径 3.8	灰釉碗の小杯。素地土は鈍い黄橙色で、黒色微粒・灰色粒を混入。回転篋削り後ナデ。内底蛇の目釉剥ぎ。畳付は露胎。	微弱な外反口縁。 02 号墓の 周辺採集
図 4.5 30	専用蔵骨器 (小型甕形)	墓室外 表面採集	蔵骨器 胴～底部	□径 一 器高 一 底径 10.5	マンガン釉掛の身。素地は暗褐色で比較的密、径 1～数 mm の石灰質粒混入。内外面ともに横位ナデ。内面に擦痕顕著に残る。	胴部下半に横位沈線及び櫛描の波状文を交互に配置。 穿孔は残存胴部で 14 箇所、底面に 6 箇所。 孔形状はいずれも円形。
図 4.5 31	専用蔵骨器 (小型甕形)	墓室外 表面採集	蔵骨器 胴～底部	□径 一 器高 一 底径 15.4	マンガン釉掛の身。内面に轆轤成形痕顕著。素地は明赤褐色で焼成良好。石灰質粒や赤褐色粒が疎らに混入。	胴部下半に櫛描?の波状文及び横位沈線 (30 と同様な配置構成) 穿孔は底面に 10 箇所 (胴部には認めず)。 孔形状は円形。



図 4.5 H -02 号墓 出土遺物

表 4.7 H-03 号墓 出土遺物集計

遺物種類・器種	出土場所	墓室内	墓庭	合計
		表土	表土	
本土産磁器	皿	1		1
	急須		1	1
金属製品	用途不詳	1		1
人骨（？）	頭蓋骨破片？他	8		8
合 計		10	1	11

表 4.8 H-03 号墓 遺構観察一覧

位置情報		座標 X：51719.18 Y：43052.54 標高 H：31.47
構築箇所の立地		丘陵縁辺部に近い斜面
墓口の向き		南西
墓の形態（分類）		岩陰墓
墓の構造	規模	墓口 幅：0.6 高さ：0.9 墓室 幅：1.8 高さ：1.2 奥行：1.4 平面観：略方形状
	特徴	岩盤岩陰の前面に石積を構築し墓室空間を確保。
	構成材	石灰岩礫及び加工石材、モルタル
	構築手法	岩陰前面に野面積みの石積で屋根・壁を構築して墓室を形成。墓口周辺の石積は比較的丁寧だが、全体的にみて石積みはやや粗雑な造りの印象を受ける。石積に生じた隙間はモルタルで充填・塗布して対処。
	墓口	切石4個で構築。墓口上部の石には閉塞石をはめ込む段あり。
	屋根・天井	墓口側は正面壁と奥の岩盤双方に載せ掛けられた石材、奥側は石灰岩岩盤の岩陰
床		平坦造成後、扁平な石材が敷かれた模様（一部残存）。
墓庭		あり、長軸（北東－南西方向）約4.1m×短軸約2.6m。 墓庭入口に区画石積、庭内南側にコンクリートブロックが「コ」字状に設置される。
埋葬人骨の有無		被埋葬者とみられる骨破片数点あり。
出土遺物	墓室内	本土産近現代磁器、金属製品、被埋葬者とみられるヒト骨小破片
	墓室外	本土産近現代磁器
備考		



写真 4.8 H-03 号墓現況（調査作業風景）



081 墓庭（南島方向より）
083 墓室内から見た上部構造

082 墓口周辺検出状況（墓室内の床石配置がみえる）
084 墓室内側壁石積

写真 4.9 H-03 号墓

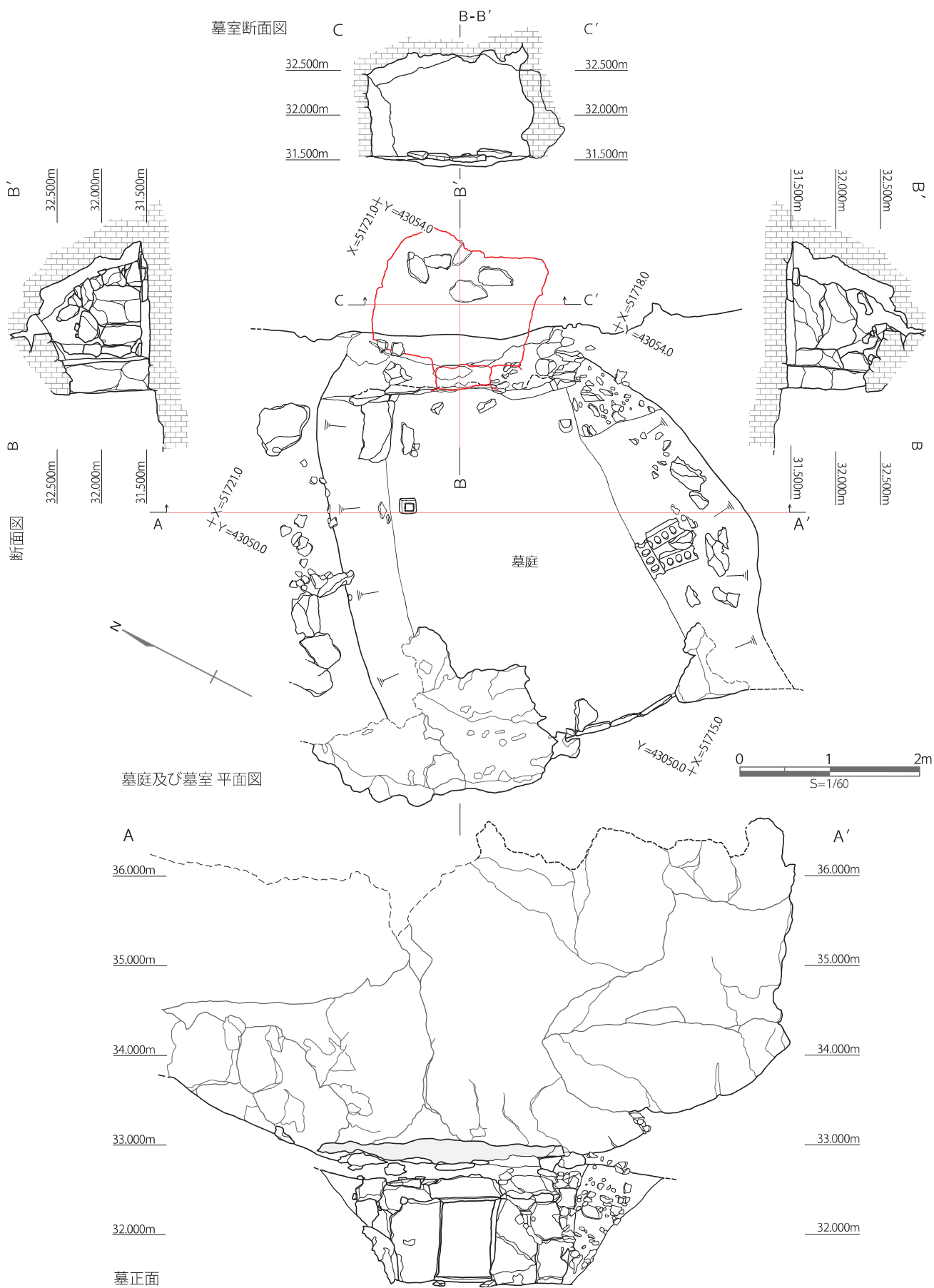


図 4.6 H-03 号墓 (平面図・断面図)

第5節 H -04 号墓

5.1. 遺構詳細 舌状に延びる丘陵尾根先端部の裾付近に構築された墓である。03 号墓の北西約 30 m、後述の 05 号墓から南西方向に約 20 m の位置にある。掘込墓の形態だが、墓室内の精査状況から本来存在した岩陰（浅い窪み）を選び、掘削加工したものと推測される。詳細は観察一覧（表 4.9）に述べる。

表 4.9 H-04 号墓 遺構観察一覧

位置情報		座標 X : 51738.87 Y : 43036.14 標高 H : 25.60
構築箇所の立地		丘陵斜面中腹
墓口の向き		北西
墓の形態（分類）		掘込墓
墓の構造	規模	墓口 幅：1.4 高さ：0.8 墓室 幅：1.3 高さ：0.9 奥行：1.6 平面観：略方形状
	特徴	露頭岩盤の岩陰を掘削加工した掘込墓
	構成材	石灰岩礫、セメント・砂利の混和材、モルタル
	構築手法	岩陰内及びその前庭部の堆積土砂を除去、浅い岩陰の窪みを掘削して墓室を形成する。 墓室内は平坦に造成される。 墓口前には石灰岩礫上面をモルタルで平滑に仕上げた台状のものを設置。
	墓口	開口部を墓口とし、幅 100cm の石灰岩石材を閉塞石に使用。閉塞石と岩盤開口部の空隙をセメント・砂利の混和材で補う。
	屋根・天井	一部掘削した石灰岩岩盤
	床	石灰岩岩盤及び造成土
墓庭		長軸約 3.3 m（南東―北西方向）×短軸約 1.4 m。
埋葬人骨の有無		なし
出土遺物	墓室内	日本国硬貨（内訳：10 円硬貨一昭和 49・51・53 年、50 円硬貨一昭和 45 年）
	墓室外	専用蔵骨器（小型甕形・小型家形）、沖縄産無釉陶器、ガラス瓶
備考		



写真 4.10 H-04 号墓現況（予備調査時）



086 墓口周辺精査後
088 墓室内部構造



087 墓室内現況
089 墓室内遺物出土状況

写真 4.11 H-04 号墓

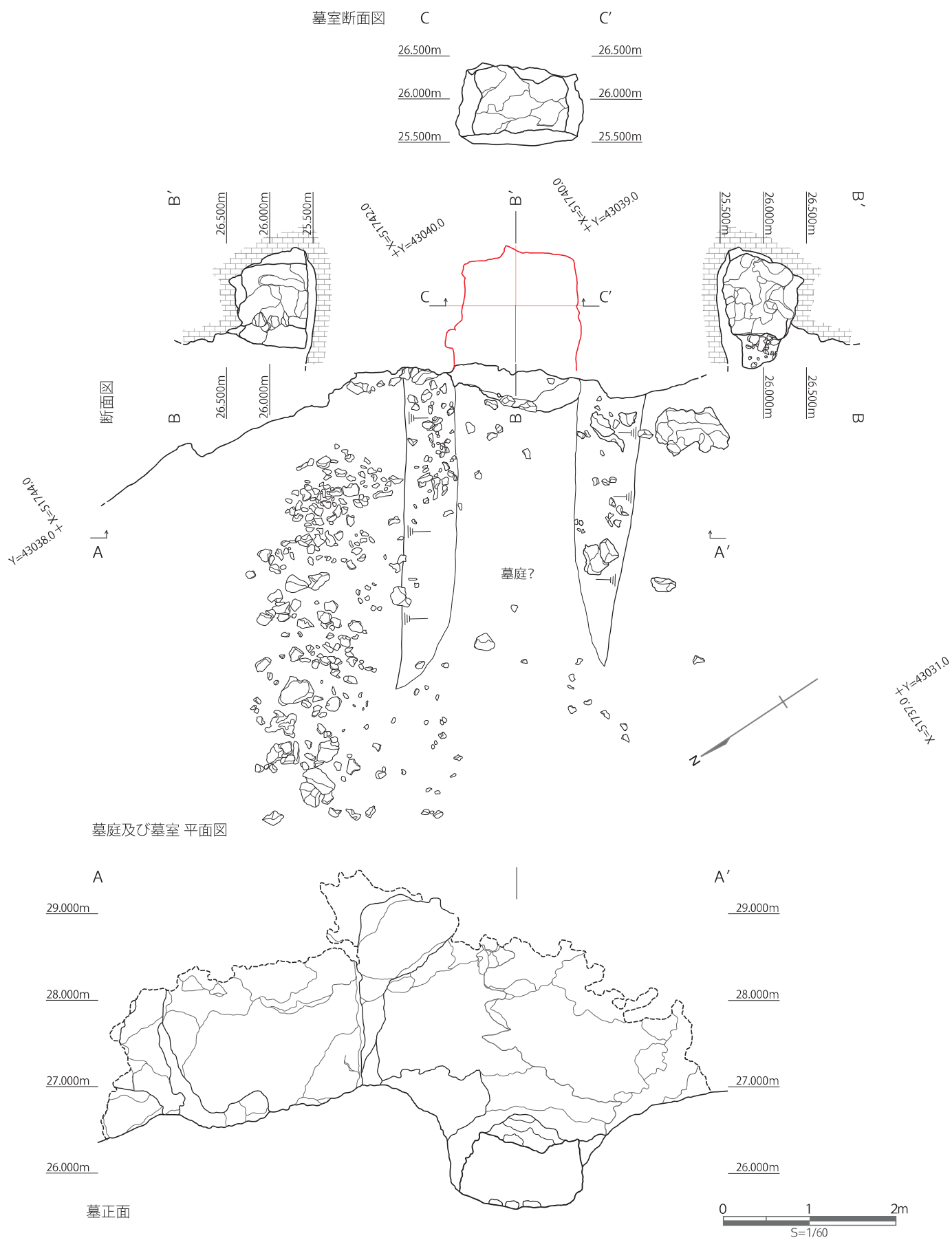


図 4.7 H-04 号墓 (平面図・断面図)

5.2. 出土遺物 墓口前面(墓庭?)及び周辺において専用蔵骨器3点を含む遺物散布が認められた。また、墓室内の掘削過程で床面直上付近で日本円硬貨が置かれた状況を認めた(写真 089)。硬貨の年銘から墓使用年代の推測も可能で、本土復帰後の時期とみられる。墓周辺から得られた専用蔵骨器には数種類あり、マンガン掛小型甕形のほか、焼成後に塗料で彩色された比較的新しいタイプ(図 4.8.32、図 4.9.35～38) もみられる。



090

090 出土遺物(小破片資料を除く)

写真 4.12 H-04 号墓出土遺物集合

表 4.10 H-04 号墓 出土遺物集計

遺物種類・器種	出土場所		墓室内	墓室外 表土	合計
	墓室	外			
専用蔵骨器	甕形/身			3	3
	" / 蓋			3	3
	小型家形/身			1	1
沖縄産無釉陶器	器種不詳			1	1
現代遺物	日本円硬貨		4		4
	ガラス製瓶			5	5
合計			4	13	17

表 4.11 H-04 号墓 出土遺物観察表

図版 番号	種類	出土 地点 層	器種 残存部位	サイズ・法量	観察所見	備考
図 4.8 32	専用蔵骨器 (小型家形)	墓室外 表面採集	身 □～底部	□径 15.8 × 14.1 器高 22.0 底径 14.1 × 12.2	素焼(陶質土器)。焼成は不良。 橙色の素地に赤褐色粒・黒褐色粒・ 石灰質粒を疎らに混入。 内外面ともにナデ調整。	正面中央の屋門文を中心に、左右及び両 側面に僧形人物文・蓮華文を配置し彩色。 内面に漆喰に似た灰色の付着物あり。
図 4.8 33	専用蔵骨器 (小型甕形)	墓室外 表面採集	蓋 □～撮部	撮径 4.2 器高 3.5 □径 13.1	マンガン釉掛。 撮の形状は扁平形。 体部は僅かに膨らむ。鋳あり。	
図 4.8 34	専用蔵骨器 (小型甕形)	墓室外 表面採集	身 □～底部	□径 8.8 器高 19.2 底径 6.5	マンガン釉掛。胴の張りは微弱。 石灰質粒・黒色粒を少量混入。 内外面ともに横位方向のナデ調整。	口縁下(頸部付近)に貼付の圈線あり。肩 付近及び胴下半に楕円による横位沈線・波 状文を交互配置。 胴下半に7箇所、底面に6箇所の穿孔あり。 孔の形状は円形(径約4mm)。
図 4.9 35	専用蔵骨器 (小型甕形)	墓室外 表面採集	蓋 □～撮部	撮径 2.4 器高 4.1 □径 12.4	素焼(陶質土器)。撮の形状は扁平形。 素地は橙色、肌理は細かい。鋳なし。 回転ナデ調整。外面に回転ヘラ削り 痕も残る。	焼成後、外面に青色塗料を全面塗布。 撮を中心に緑色・白色塗料で葉状文様をめ ぐらす。
図 4.9 36	専用蔵骨器 (小型甕形)	墓室外 表面採集	身 □～底部	□径 11.5 器高 16.8 底径 10.2	素焼(陶質土器)。寸胴器形で上げ底。 素地は橙色、肌理は細かい。 回転ナデ調整。胴下半にタテ方向 の篋削り痕もあり。	線彫で正面に位牌形状の屋門、蓮華文を 左右に配置構成。屋門内を除く外面全面に 青色塗料を塗布後、緑色・白色塗料で彩色。 屋門内に銘書はみられず。
図 4.9 37	専用蔵骨器 (小型甕形)	墓室外 表面採集	蓋 □～撮部	撮径 1.9 器高 3.2 □径 10.4	素焼(陶質土器)。撮の形状は扁平形。 素地は橙色、肌理は細かい。鋳なし。 回転ナデ調整。外面に回転ヘラ削り 痕も残る。	焼成後、外面全面に青色塗料を塗布。 撮を中心に緑色・白色塗料で葉状文様をめ ぐらす。
図 4.9 38	専用蔵骨器 (小型甕形)	墓室外 表面採集	身 □～底部	□径 8.2 器高 12.3 底径 7.7	素焼(陶質土器)。寸胴器形で上げ底。 素地は橙色、肌理は細かい。 1mm程度の黒色微粒混入あり。 回転ナデ調整。胴下半にタテ方向 の篋削り痕もあり。	線彫で正面に位牌形状の屋門、蓮華文を 左右に配置構成。屋門内を除く外面全面に 青色塗料を塗布後、緑色・白色塗料で彩色。 屋門内に銘書はみられず。

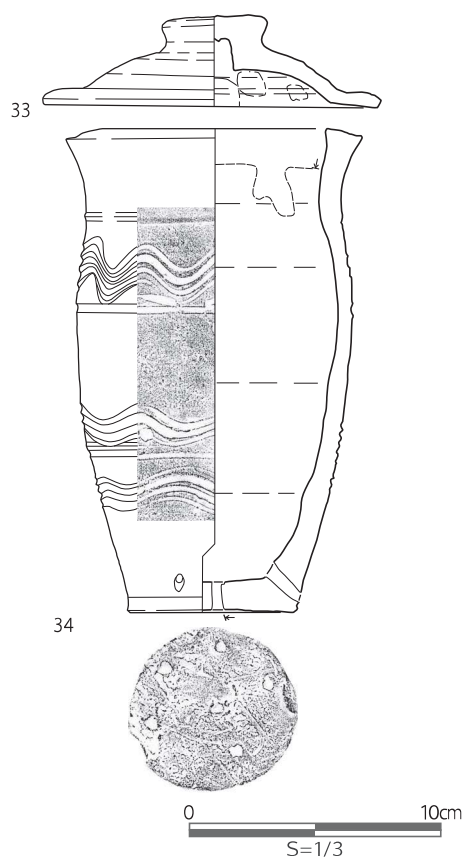
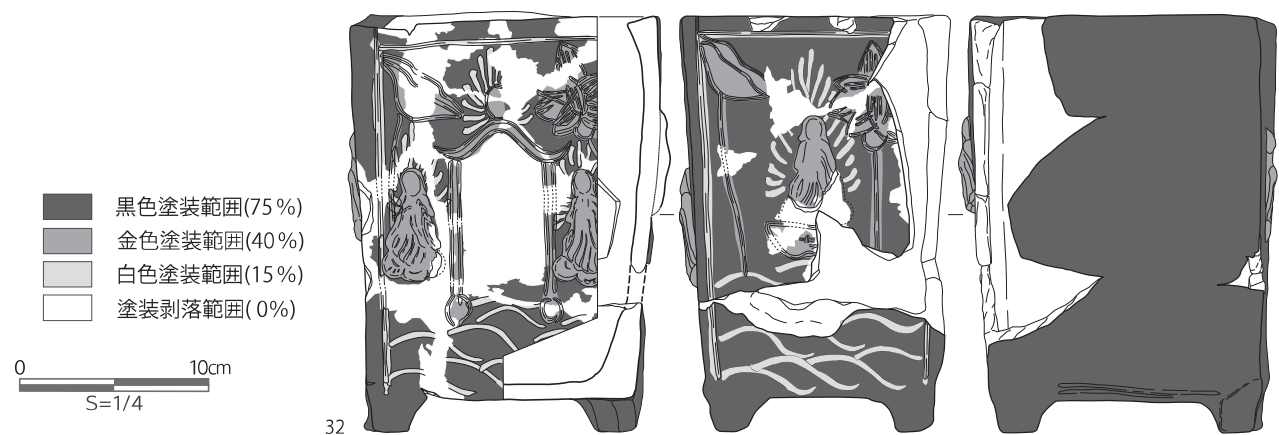


図 4.8 H-04 号墓 出土遺物 (1)

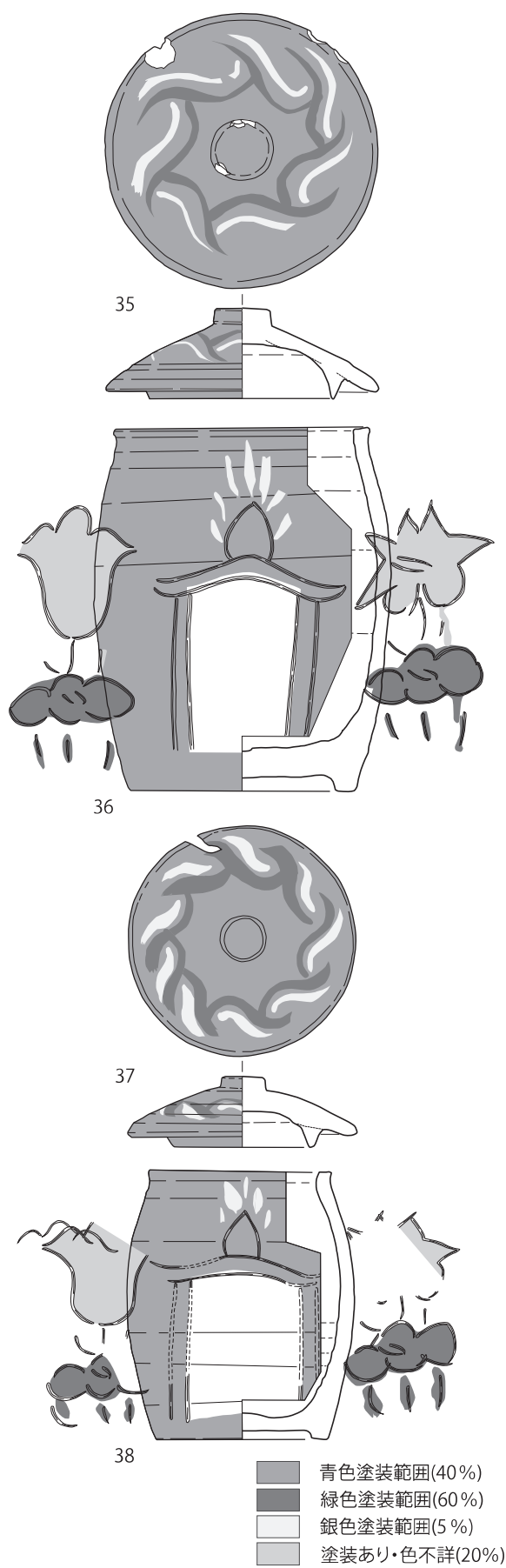


図 4.9 H-04 号墓 出土遺物 (2)

第6節 H -05 号墓

6.1. 遺構詳細 舌状に延びた丘陵先端部の北側斜面地に密集する岩陰墓群(H -04 ~ 08 号墓) の一つで、04 号墓より西方向に約 20 m程の位置に構築される。墓口を塞ぐ石積が残る状態だが、墓室内に蔵骨器等は無く、周辺には破棄された陶器破片の集中散布がみられた (H -05・06 号墓前庭部 出土遺物)。

表 4.12 H-05 号墓 遺構観察一覧

位置情報		座標 X: 51752.08 Y: 43048.17 標高 H: 28.60
構築箇所の立地		丘陵斜面
墓口の向き		北北西
墓の形態 (分類)		岩陰墓 (岩陰囲込墓)
墓の構造	規模	墓口 幅: 1.1 高さ: 0.7 墓室 幅: 1.4 高さ: 0.6 奥行: 1.1 平面観: 略方形
	特徴	岩陰内の土砂除去、一部を掘削して墓室を形成。
	構成材	石灰岩礫、モルタル
	構築手法	露頭岩盤の岩陰内の堆積土を掘り出してできた空間を利用する点で岩陰墓の範疇か。墓室内の正面奥壁及び天井の一部には岩盤掘削らしき痕跡も認め、モルタルが塗布された模様。
	墓口	岩陰開口部を墓口とし、前面に野面積みの石積を構築する。石積は、本来は墓口全面を塞ぐ高さまで構築されていた可能性もある。墓口付近の床には並列する石灰岩礫を確認。
	屋根・天井	石灰岩岩盤
	床	墓口付近に石灰岩礫を並べて設置後、床面を平坦に造成。
墓庭		なし
埋葬人骨の有無		なし
出土遺物	墓室内	ガラス製品 (瓶)
	墓室外	なし
備考		・墓室内の一部にタール状の黒色土範囲を確認。



写真 4.13 H -05 号墓現況 (調査着手時)



092 墓口周辺 石積除去後
094 調査作業風景



093 墓室内検出状況
095 墓周辺 遺物散布状況

写真 4.14 H-05 号墓

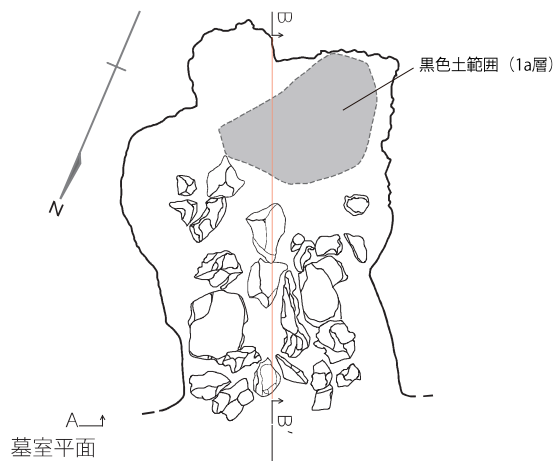


図 4.10 H-05 号墓 (平面図・断面図)

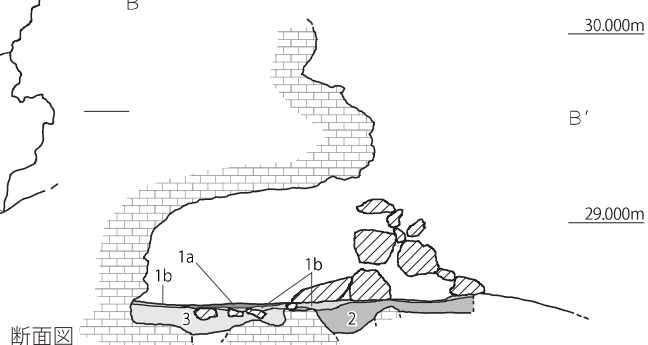
表 4.13 H-05 号墓 出土遺物集計

出土場所		墓室内	墓室外 表土	合計
遺物種類・器種				
ガラス製品	瓶	1		1
合 計		1		1

H-05号墓断面

- 1a 10YR2/1 黒色. 粘質土. 05号墓室内でのみ確認.
炭化物よりタールに似た粘性付着物の印象を受ける.
1b 10YR3/3 暗褐色. 粘質土.
2 10YR4/3 にぶい黄褐色. 粘質土.
3 10YR6/6 明黄褐色. 粘質土. 地山.

0 1 2m
(S=1/40)



第7節 H -06 号墓

7.1. 遺構詳細 05号墓の北西に隣接する小規模の岩陰墓である。後述の 07・08号墓とともに墓室内に蔵骨器が残る状態で確認され、置かれた蔵骨器及び埋葬物（内容物）も共通している点が留意される。

表 4.14 H-06 号墓 遺構観察一覧

位置情報	座標 X : 51751.97 Y : 43050.53 標高 H : 29.06
構築箇所の立地	丘陵斜面
墓口の向き	北西
墓の形態（分類）	岩陰墓？掘込墓？



写真 4.15 H -06 号墓現況（調査着手時）

墓の構造	規模	墓口 幅：0.6 高さ：0.6 墓室 幅：0.6 高さ：0.9 奥行：0.4 平面観：略方形
	特徴	露頭岩盤の窪みを利用するが、岩盤を掘削し蔵骨器設置面を造り出す点で掘込墓に近い。小規模な造り。
	構成材	石灰岩礫（転石）、コンクリート部材（既製品の転用）、モルタル
	構築手法	斜面露頭の石灰岩岩盤を断面「L」字状に掘削し床面形成。野面積みの石積で墓口周辺の壁を構築する。閉塞石には板状のコンクリート材を使用。閉塞石を設置後、建築部材等の破損後転用とみられるコンクリート塊を屋根として載せる。石積と閉塞石や屋根の隙間、凹凸部にモルタルを塗布。
	墓口	設置された閉塞石の形状で開口部とする。 閉塞石：板状コンクリート材の平滑な面を前面に向けた意識的な設置。
	屋根・天井	石灰岩岩盤、側壁に掛けたコンクリート塊
	床	岩盤の一部を掘削して平坦面を造り出す。
	墓庭	なし
	埋葬人骨の有無	なし（人骨の代用とみられる枝サンゴ・サンゴ礫が納められる）
出土遺物	墓室内	専用蔵骨器（小型家形）
	墓室外	本土産磁器（印判染付）碗、ガラス製コップ
備考		・墓室はきわめて狭小であり、個人墓として構築・使用したとみられる。



097 墓口周辺精査後
099 墓室の断面構造及び蔵骨器設置状況

098 閉塞石及び石積除去後
100 墓室内完掘状況

写真 4.16 H-06 号墓

表 4.15 H-06 号墓 出土遺物集計

出土場所		墓室内	墓室外 表土	合計
遺物種類・器種				
専用蔵骨器	小型家形 / 身	1		1
	〃 / 蓋	1		1
本土産磁器	印判染付碗		1	1
ガラス製品	コップ		1	1
合 計		2	2	4

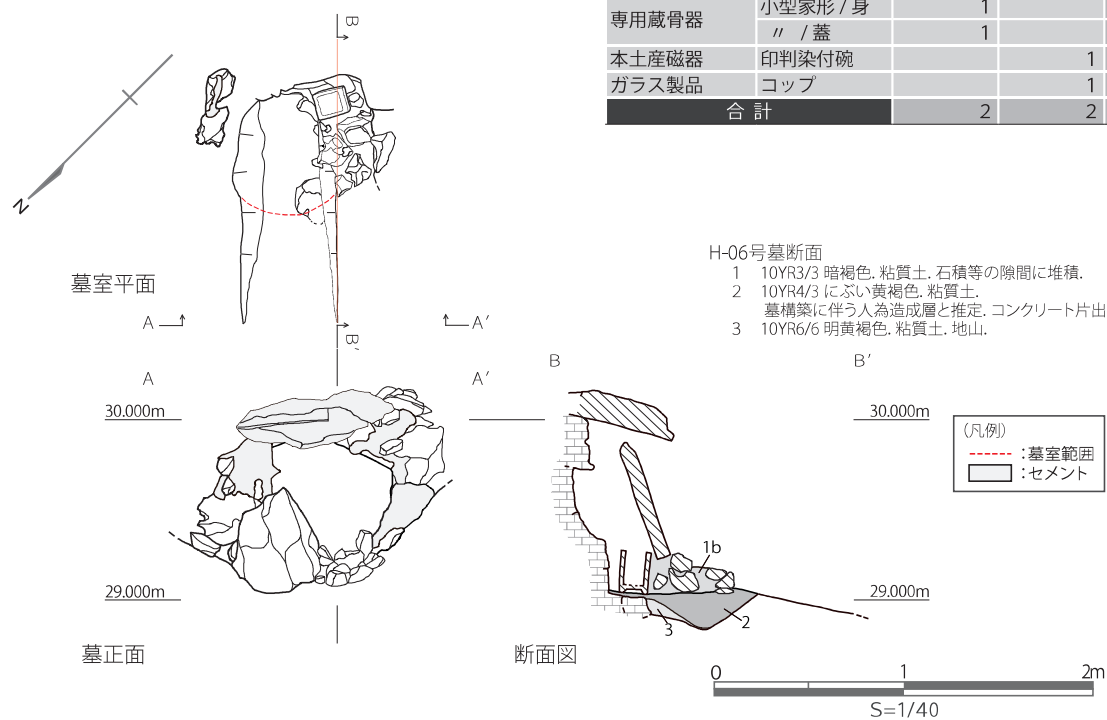


図 4.11 H-06 号墓 (平面図・断面図)

表 4.16 H-06 号墓 出土遺物観察表

図版番号	種類	出土地点 層	器種 残存部位	サイズ・法量	観察所見	備考
図 4.12 39-1	専用蔵骨器 (小型家形)	墓室内 (床上安置)	蓋 完品	棟長 10.2 器高 13.9 梁 14.9 × 桁 13.6	素焼(陶質土器)。赤色粒・黒褐色粒・少量の石灰質粒を混入。 篋削リ＋ナデ。内面に布目痕あり。	小型の御殿形。 粘土貼付の龍頭や鯨(しゃちほこ)、獅子等の装飾を施した後に複数色の塗料で彩色。
図 4.12 39-2	専用蔵骨器 (小型家形)	墓室内 (床上安置)	身 口～底部	口径 16.1 × 13.6 器高 21.9 底径 14.1 × 12.2	素焼(陶質土器)。 赤色粒・黒褐色粒及び少量の石灰質粒を混入。内外面ナデ。	屋門を中心に左右及び両側面に粘土貼付の僧形人物文や線彫の連華文を配置。 複数色の塗料で彩色するが屋門内は露胎。

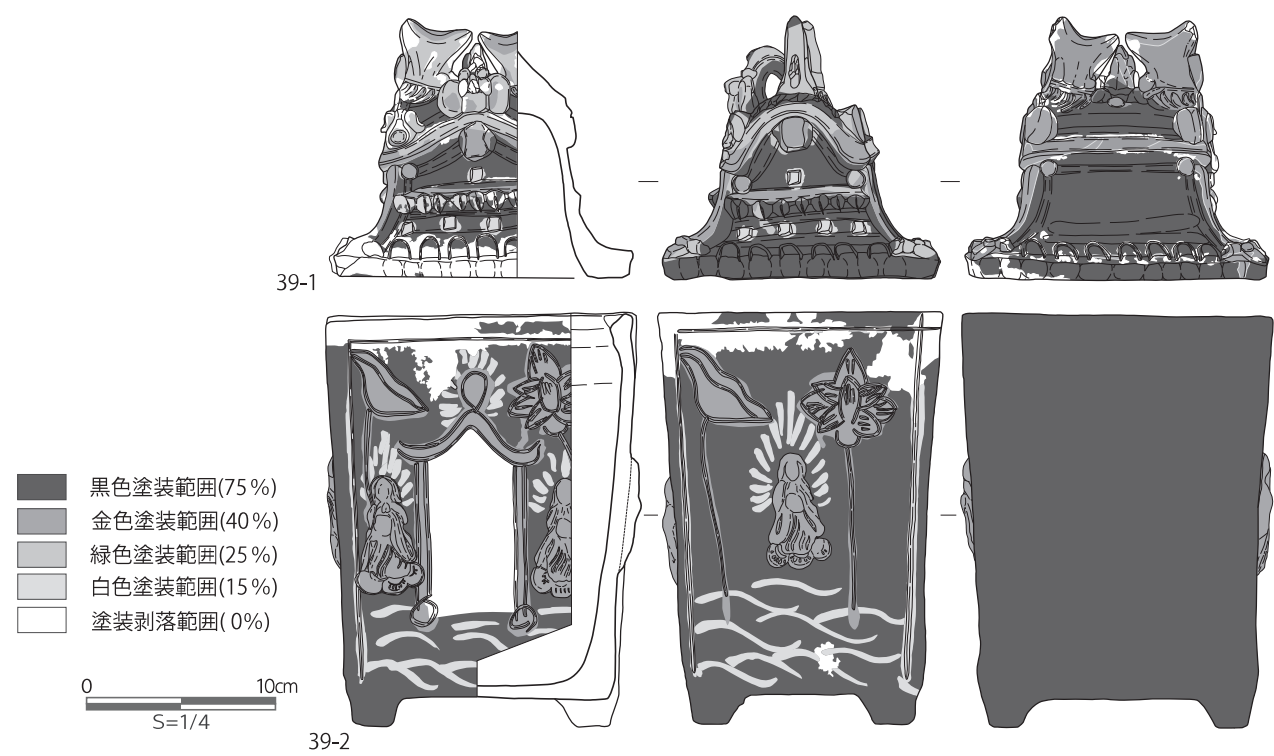


図 4.12 H-06 号墓 出土遺物

7.2 出土遺物 H-06 号墓では墓室内に安置された専用蔵骨器（小型家形）及び供献品のガラス製品が得られた。

06 号墓は 05 号墓と隣接するが、前方の斜面に意図的に破損された蔵骨器や沖縄産施釉陶器破片の集中的散布を認めた(右写真 101)。これらを回収後、接合作業を行った結果、専用蔵骨器 3 点（甕形の蓋＋身の 1 セット、小型甕形で 2 セット）を復元できた。

06 号墓が調査時点まで塞がっていた状況等から、当初は 05 号墓で使用されていたものと考えたが、復元遺物には収納困難なサイズも含まれており、別の墓に納められていた可能性も考えられる。使用箇所の特定は難しいが、遺物散布位置から今回は「H-05・06 号墓周辺（前庭部）」で取り扱う事とする。

表 4.17 H-05・06 号墓前庭部 出土遺物集計

遺物種類・器種		出土場所	表面採集	合計
専用蔵骨器	甕形 / 身		1	1
	" / 蓋		1	1
	小型甕形 / 身		2	2
	" / 蓋		2	2
沖縄産施釉陶器	火入		1	1
合 計			7	7

101 遺物散布状況
(写真奥に H-05 号墓)
102 復元遺物 集合



写真 4.17 H-05・06 号墓前庭部 出土遺物

表 4.18 H-05・06 号墓前庭部 出土遺物観察表

図版 番号	種類	出土 地点 層	器 種 残存部位	法 量	観 察 所 見	備 考 等
図 4.13 40	専用蔵骨器 (甕形)	05・06 号 墓前庭部 表面採集	蓋 口～撮部	撮径 8.4 器高 12.3 口径 29.6	41 に伴う蓋。 赤褐色粒・石灰質粒が疎らに混入。 回転鋸削り＋ナデ調整。	撮部は饅頭形と推定。撮部下の台は 2 段。 銘書は認められず。
図 4.13 41	専用蔵骨器 (甕形)	05・06 号 墓前庭部 表面採集	身 口縁～底	口径 31.1 器高 71.5 底径 20.0	マンガン釉掛。 胴部の張り弱く、口縁までスマートな器形。 橙色の素地に径 2～4mm 程度の石灰質粒・ 黒色粒が疎らに混入。肌理は細かい。	胴上部に蓮弁を象った線彫文様。同部位 と下半に回転櫛描で横位直線文・波状文 を交互に配置。胴下半の残存部及び底面 に穿孔あり(計 12 箇所)。孔の形状は円形。
図 4.14 42	専用蔵骨器 (小型甕形)	05・06 号 墓前庭部 表面採集	蓋 口～撮部	撮径 4.6 器高 6.1 口径 17.9	マンガン釉掛。 外面施釉で内面露胎。赤褐色の素地に、径 数 mm の石灰質粒・赤褐色粒疎らに混入。	撮部は扁平形で体部は膨らむ形。鏝あり。 内面に指押え痕あり。
図 4.14 43	専用蔵骨器 (小型甕形)	05・06 号 墓前庭部 表面採集	身 口縁～底	口径 18.8 器高 30.5 底径 10.5	マンガン釉掛。緩やかな外反口縁に胴部の 張り弱く、口径>胴径。内外とも横位ナデ。 石灰質粒・黒色粒の混入あり。	頸部～胴下半にかけて横位沈線及び櫛描 の波状文を交互に配置。頸部付近に貼付 による圏線あり。 胴下半の残存部及び底面に穿孔あり(底 面には 5 箇所)。孔の形状は方形。
図 4.14 44	専用蔵骨器 (小型甕形)	05・06 号 墓前庭部 表面採集	蓋 口～撮部	撮径 17.4 器高 4.7 口径 17.4	マンガン釉掛(内面は露胎)。	撮部は扁平形。鏝あり。
図 4.14 45	専用蔵骨器 (小型甕形)	05・06 号 墓前庭部 表面採集	身 口縁～底	口径 18.5 器高 28.1 底径 10.4	マンガン釉掛。緩やかな外反口縁で胴部の 張り弱く、口径>胴径。内外とも横位ナデ。 橙～赤褐色の素地に石灰質粒の混入あり。	頸部～胴下半にかけて横位沈線及び櫛描 の波状文を交互に配置。頸部付近に貼付 による圏線あり。 胴部残存部及び底面に穿孔あり(底面 には 6 箇所)。孔形状はいずれも円形。
図 4.14 46	沖縄産施釉 陶器	05・06 号 墓前庭部 表面採集	火入 口縁～ 高台脇	口径 9.0 器高 一 底径 一	寸胴(筒状)に内湾口縁。胴径は 10.8cm。 黒褐色の素地に灰白色・黒色微粒が混入。 全面に白化粧土。口縁内～外面に鉄釉施釉 後、口唇端部及び高台脇を釉剥ぎ。	胴部に沈線 2 条。

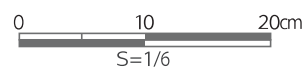
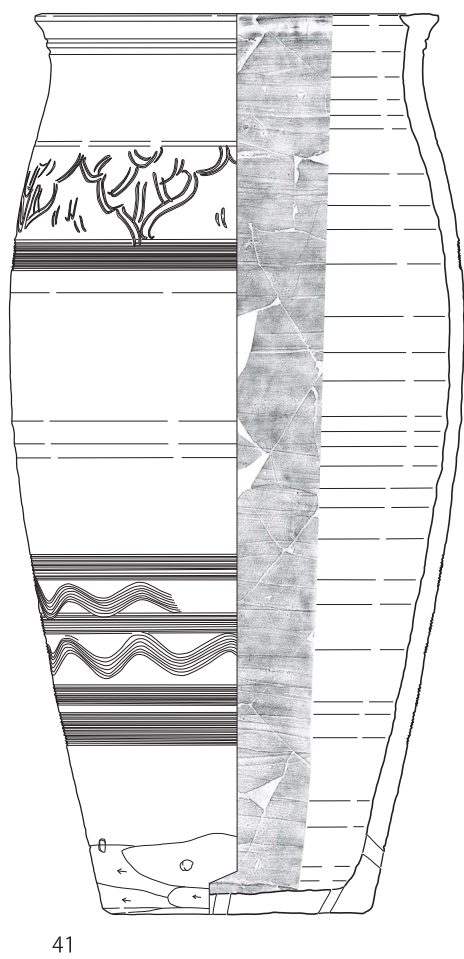
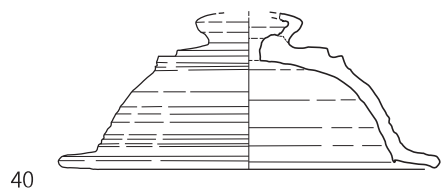


图 4.13 H-05 · 06 号墓前庭部 出土遗物 (1)

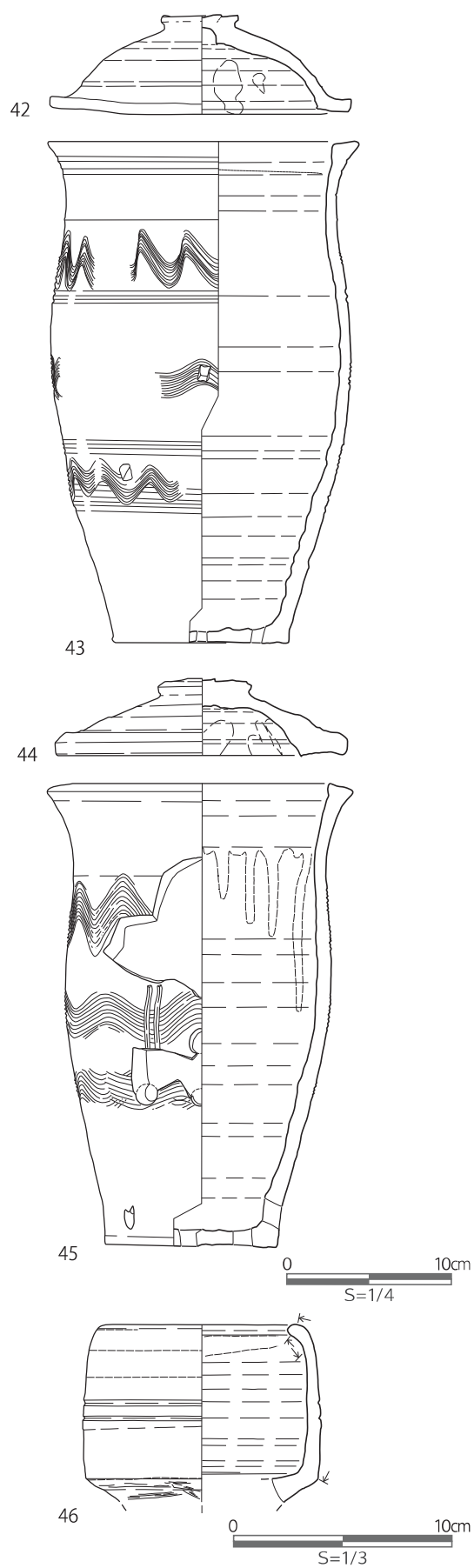


图 4.14 H-05·06 号墓前庭部 出土遗物 (2)

第8節 H -07 号墓

8.1. 遺構詳細 05・06 号墓のすぐ上方に構築された岩陰墓である。墓室内に蔵骨器が置かれた状態であった。墓の形態・規模及び埋葬状況から、06・08 号墓と同様、個人墓として構築・利用された蓋然性が高く考えられる。詳細は観察一覧に記述する

8.2. 出土遺物 蔵骨器1点のみ得ている（表 4.19）。



写真 4.18 H -07 号墓現況（調査着手時）

位置情報		座標 X : 51749.58 Y : 43048.75 標高 H : 31.09
構築箇所の立地		丘陵縁辺近くの斜面
墓口の向き		北東
墓の形態（分類）		岩陰墓
墓の構造	規模	墓口 幅：0.6 高さ：1.0 墓室 幅：0.6 高さ：0.8 奥行：0.5 平面観：略円形
	特徴	ノッチ状に抉れた岩陰を利用した岩陰墓
	構成材	石灰岩礫、コンクリート部材（既製品の転用とみられる）、モルタル
	構築手法	ノッチ状に抉れた岩陰の形状にあわせ、閉塞石との空隙部を石灰岩礫を用いた石積で補う形態。閉塞石には建築部材等の破損後転用とみられる板状のコンクリート材を使用。石積の隙間や表面にはモルタルを充填・塗布。
	墓口	設置された閉塞石の形状で開口部とする。 閉塞石：板状コンクリート材の平滑な面を前面に向けた意識的な設置。 墓口前には石灰岩礫を並べてモルタル塗布で平滑にした台を設置。
	屋根・天井	石灰岩岩盤
	床	岩盤の一部を掘削して平坦に造成。
墓庭		なし
埋葬人骨の有無		なし（人骨の代用とみられる枝サンゴ・サンゴ礫が納められる）
出土遺物	墓室内	専用蔵骨器（小型家形）
	墓室外	なし
備考		・閉塞石の取外しは可能だが、墓室の規模は狭小で蔵骨器の追加は制限される（個人墓の可能性）。 ・蔵骨器内には枝サンゴ・サンゴ礫が納められた状態。

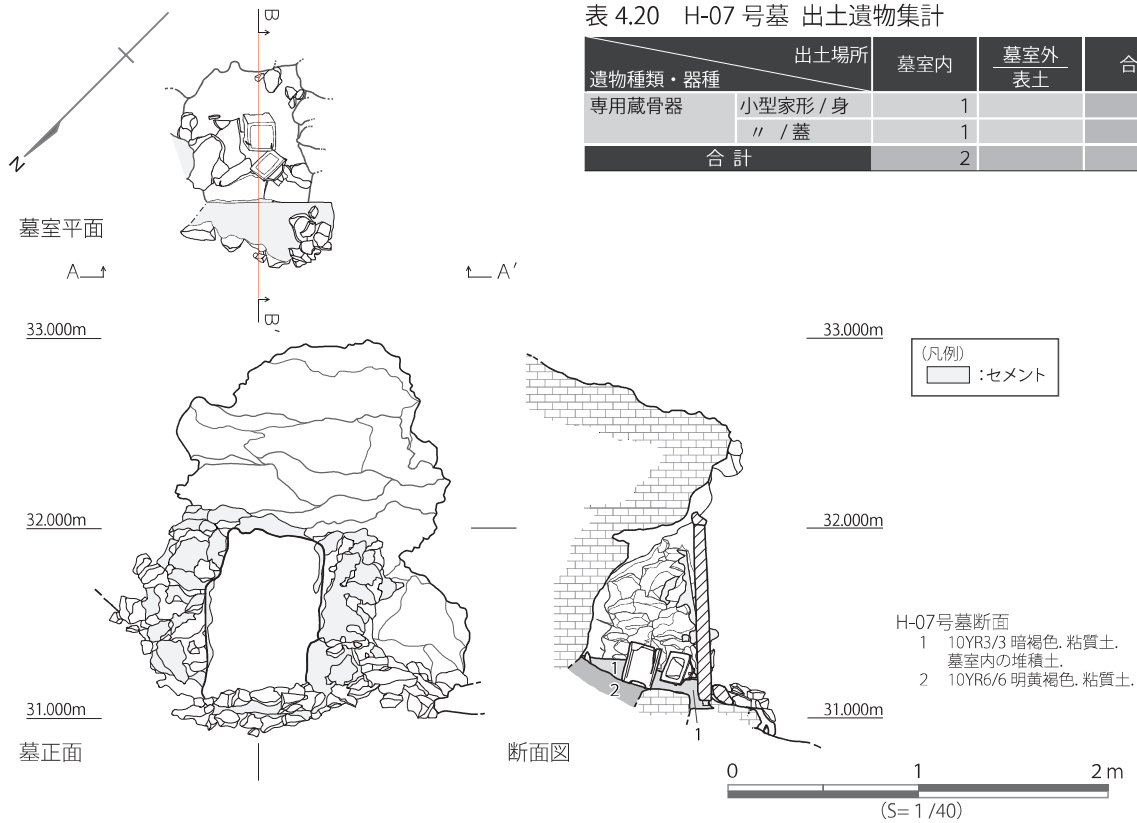


表 4.20 H-07 号墓 出土遺物集計

出土場所		墓室内	墓室外 表土	合計
遺物種類・器種	小型家形 / 身	1		1
	〃 / 蓋	1		1
合 計		2		1

図 4.15 H-07 号墓（正面図・断面図・墓室平面図）

表 4.21 H-07 号墓 出土遺物観察表

図版番号	種類	出土地点 層	器種 残存部位	サイズ・法量	観察所見	備考
図 4.16 47-1	専用蔵骨器 (小型家形)	墓室内 床直上	蓋 完品	棟長 10.5 器高 14.5 梁 15.9 × 桁 14.8	素焼(陶質土器)。赤色粒・黒褐色粒・石灰質粒を少量混入。 内外とも工具ナデ。内面に布目痕。	小型の御殿形。 粘土貼付の龍頭や鯨(しゃちほこ)、獅子等の装飾を施した後に複数色の塗料で彩色。
図 4.16 47-2	専用蔵骨器 (小型家形)	墓室内 床直上	身 口~底部	口径 18.0 × 16.2 器高 24.1 底径 14.3 × 12.1	素焼(陶質土器)。 赤色粒・黒褐色粒・石灰質粒を混入。	正面中央の屋門文を中心に、左右及び両側面に僧形人物文・蓮華文を配置し彩色。 内面に漆喰? に似た付着物あり。

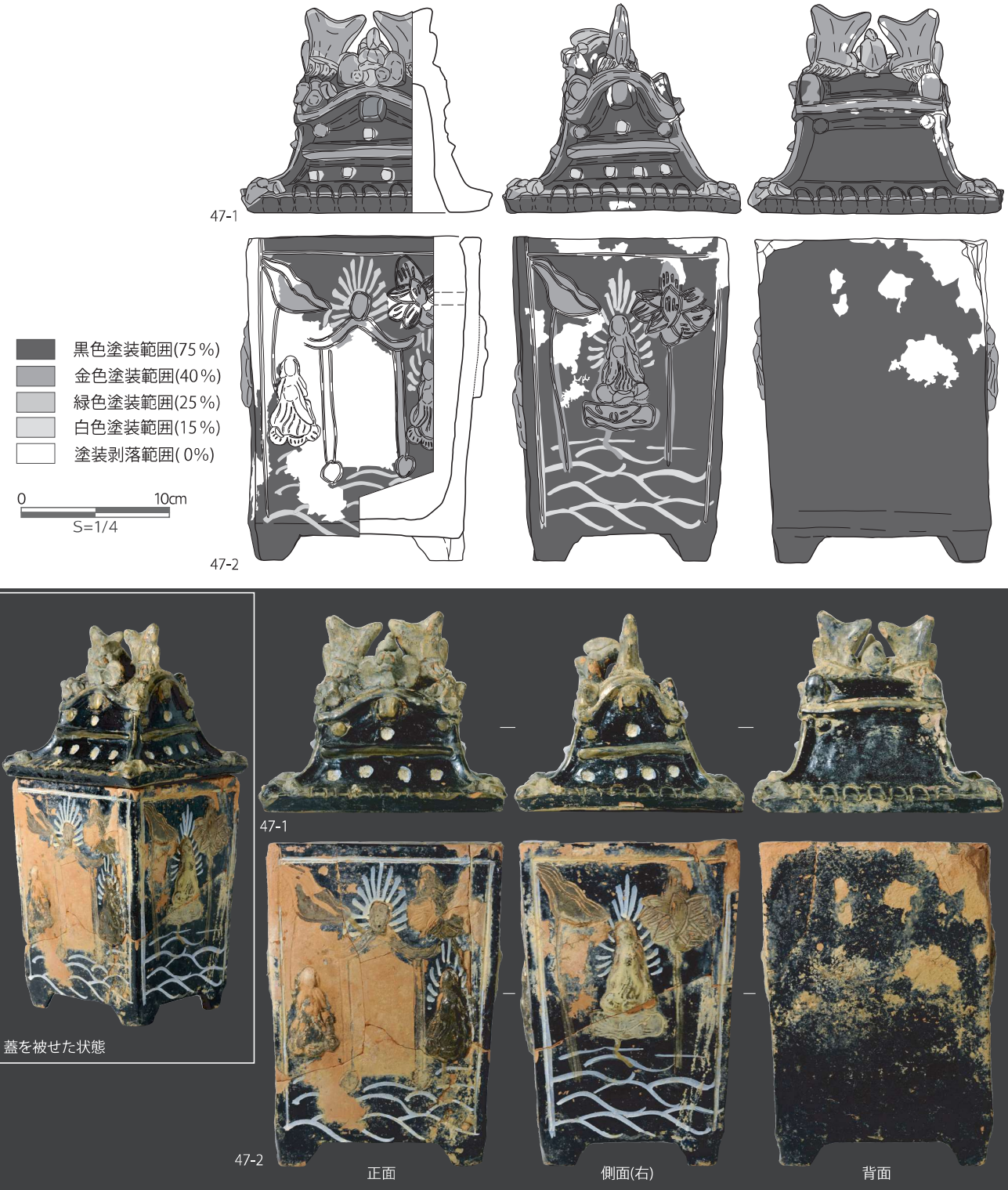


図 4.16 H-07 号墓 出土遺物

第9節 H -08 号墓

9.1. 遺構詳細 07号墓東に隣接する墓で岩陰前面を石積でドーム状に覆い塞ぐ形態が特徴的である。

9.2. 出土遺物 墓室内から専用蔵骨器の他、外国産磁器片が出土している（表 4.22）。墓前方の崖下斜面より破損した沖縄産無釉陶器壺を得ており、あるいは08号墓以前の墓利用の可能性も示唆される。

表 4.22 H-08 号墓 遺構観察一覧

位置情報		座標 X : 51747.91 Y : 43051.01 標高 H : 31.76
構築箇所の立地		丘陵縁辺近くの斜面
墓口の向き		北東
墓の形態（分類）		岩陰墓
墓の構造	規模	墓口 幅：— 高さ：— 墓室 幅：0.9 高さ：1.6 奥行：0.9 平面観：略円形
	特徴	岩陰の一部を石積でドーム状に覆い塞ぐ形態
	構成材	石灰岩礫、コンクリートブロック（既製品の転用）、モルタル
	構築手法	岩陰前面に野面積みの石積で天井部までドーム状に構築。石積は粗雑な造りで、石灰岩礫の他、コンクリートブロックを使用。多く生じた隙間をモルタルで充填して対処。
	墓口	なし。
	屋根・天井	石灰岩岩盤
	床	岩盤を掘削し平場造成を行った模様、蔵骨器安置箇所に粘板岩角礫を上面が水平になるように設置。
墓庭		なし
埋葬人骨の有無		なし（人骨の代用とみられる枝サンゴ・サンゴ礫が納められる）
出土遺物	墓室内	専用蔵骨器（小型家形）、外国産磁器
	墓室外	沖縄産無釉陶器壺
備考		・墓のすぐ前方にコンクリート製香炉（既製品）を設置。



写真 4.19 H -08 号墓 現況（予備調査時）

表 4.23 H-08 号墓 出土遺物集計

出土場所		墓室内	墓室外 表土	合計
遺物種類・器種	専用蔵骨器 小型家形 / 身	1		1
	〃 / 蓋	1		1
沖縄産無釉陶器	壺		1	1
外国産陶磁器	器種不詳	1		1
現代遺物			1	1
合 計		3	2	5

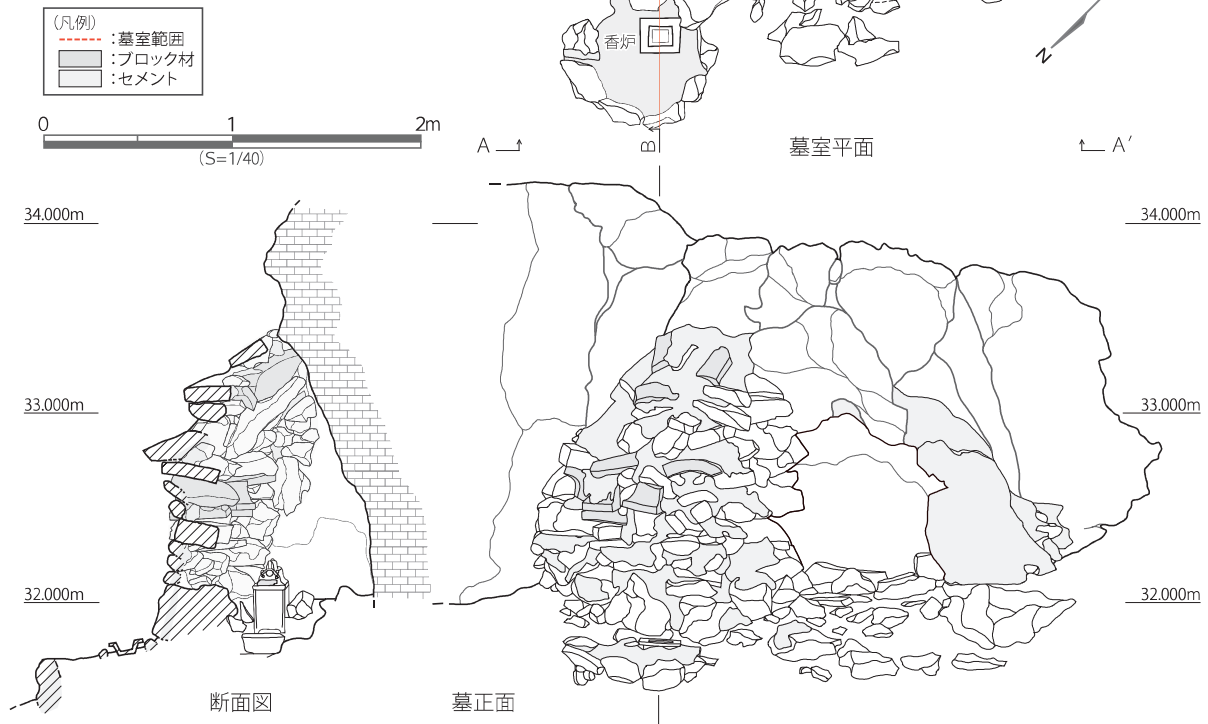


図 4.17 H-08 号墓（正面図・断面図・墓室平面図）

表 4.24 H-08 号墓 出土遺物観察表

図版 番号	種 類	出土 <u>地点</u> 層	器 種 残存部位	サイズ・法量	観 察 所 見		備考
図 4.18 48-1	専用蔵骨器 (小型家形)	墓室内 床直上	蓋 完品	棟長 10.8 器高 14.5 梁 17.3 × 桁 15.7	素焼 (陶質土器). 石灰質粒を少量混入. 内外とも工具ナデ. 内面に布目痕.	小型の御殿形. 龍頭や鯨 (しゃちほこ)・獅子 等の装飾施した後、複数色の塗料で彩色. 「棚原比嘉二代目長男アジ代」の銘書.	石積 覆う モルタル が付着
図 4.18 48-2	専用蔵骨器 (小型家形)	墓室内 床直上	身 口～底部	口径 18.0 × 16.2 器高 24.1 底径 16.9 × 14.6	素焼 (陶質土器). 赤色粒・黒褐色粒・石灰質粒を混入.	正面中央の屋門文を中心に、左右及び両 側面に偕形人物文・蓮華文を配置し彩色. 屋門内に銘書がかすかに残る.	

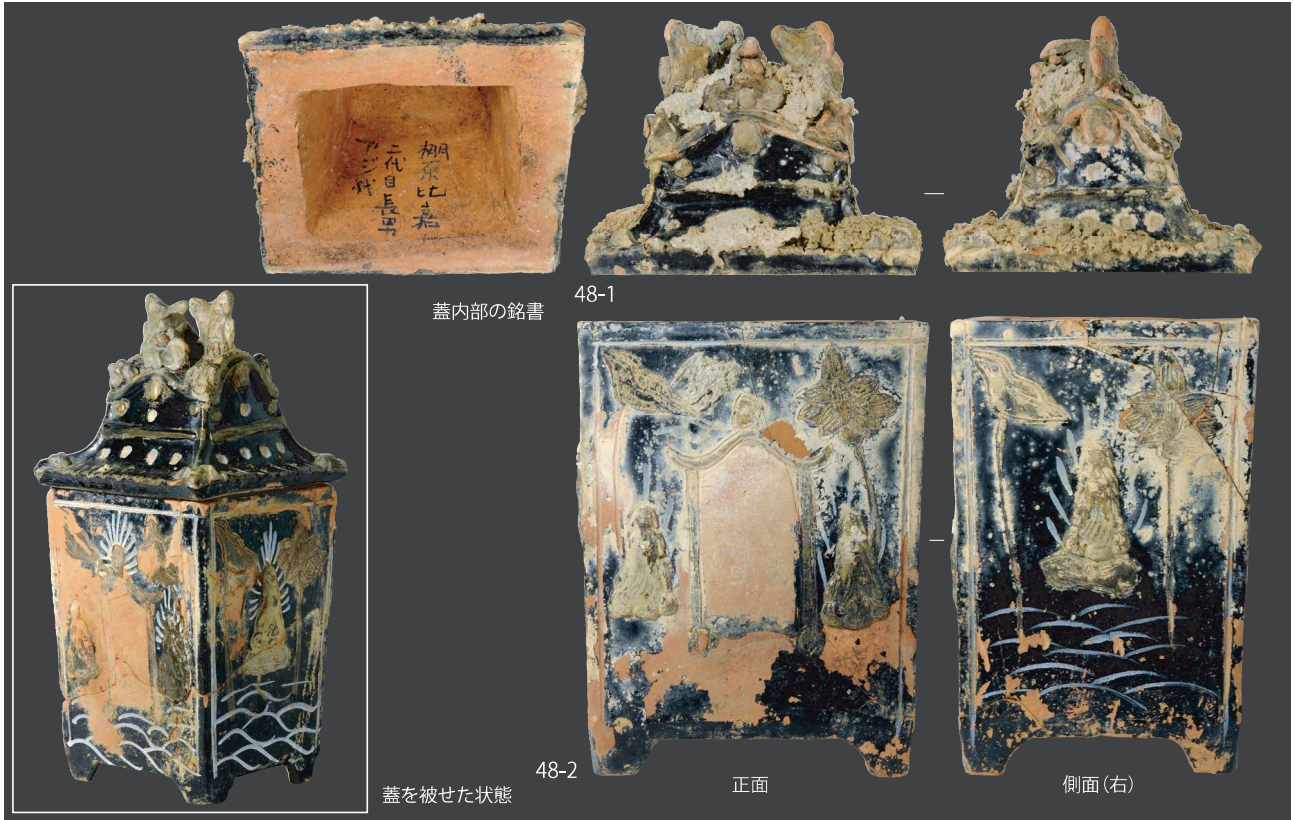
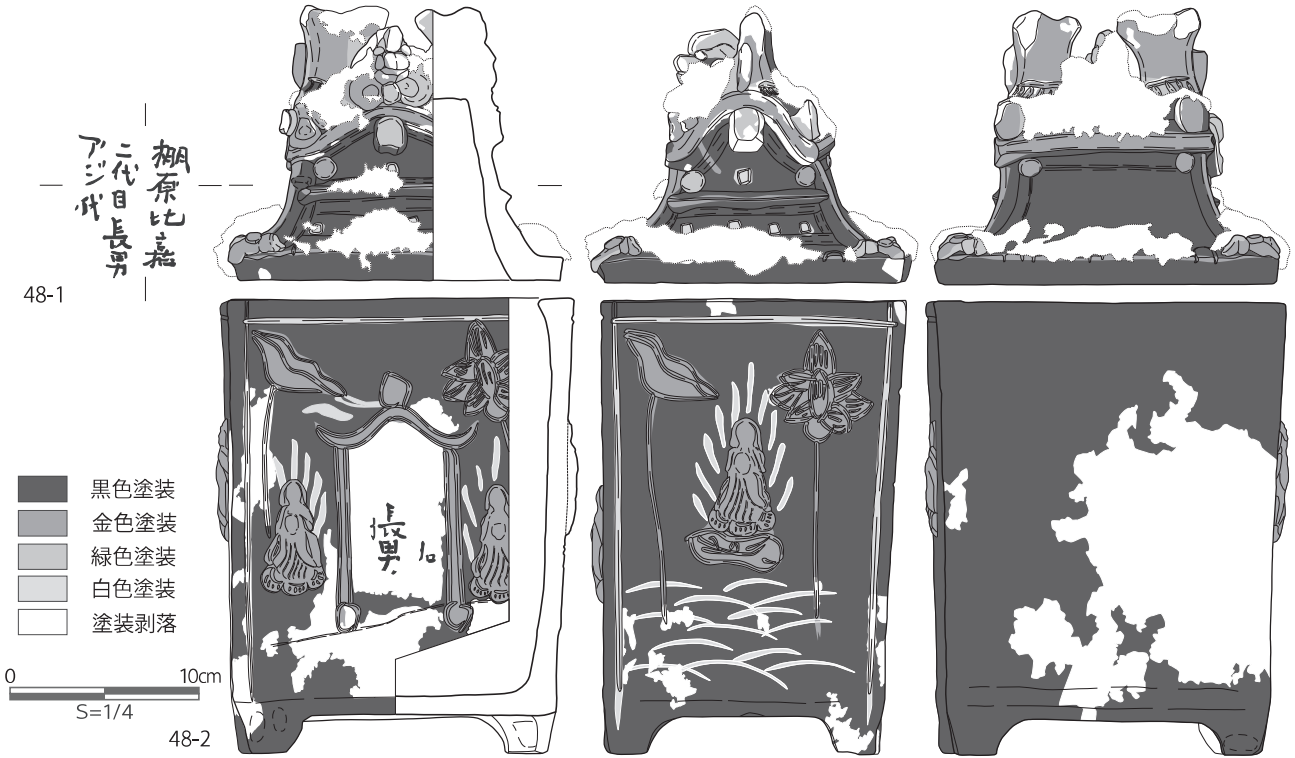


図 4.18 H-08 号墓 出土遺物



105

105 閉塞石及び側壁除去後

写真 4.20 H-07 号墓



106



107

106 墓室内 蔵骨器設置状況（墓室床面断面）

107 人骨の代用に蔵骨器に納められたサンゴ礫



108

108 石積及び墓室の断面構造（半截状況）

写真 4.21 H-08 号墓



109



110

109 墓室内 蔵骨器設置状況（下に台座の角礫を設置）

110 墓室内完掘状況

第V章 幸地原の炭焼窯跡

第1節 億首川上流域生産遺跡群の概要

国頭方東海道跡ほか交通遺跡群が位置する奥首の上流、現在金武ダムに水没する小盆地状の低地部はかつてフクジと呼ばれた水田地であり、その四周を樹枝状に走る大小の沢が起伏に富む地形を形作る。

当該地一帯は、ナンザトゥヤマ（並里のヤマの意）の古称にみるように、かつて並里集落と関わりが深いヤマであり、往時の地形景観や特定の生産活動及びその場所に係わる古（小）地名もよく残る。例えば、クスヌチセイゾー（樟脳製造跡）やエースブー（藍壺）、ヤマクモー（山工毛）等である*。これまでの踏査主体による予備調査により、沢やサーク**を利用した耕地跡（水田・畑跡）など、かつての土地利用・生産活動の実態が窺える生産遺跡群が確認されている。

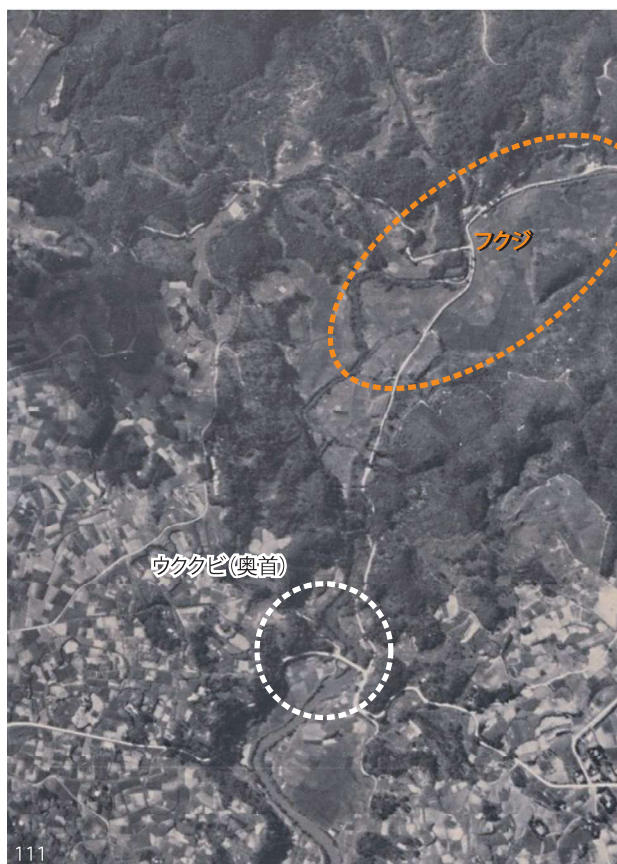


写真 5.1 億首川上流域鳥瞰（金武ダム建設前）

第2節 炭焼窯周辺の立地、基本層序

2.1. 遺跡立地 今回調査対象となった炭焼窯跡は、下流側（ウククビ）からみてフクジの最奥部、小字幸地原を流れる沢沿いの丘陵斜面地に立地する。過去県内事例では大宜味村大保川上流域や恩納村大袋原など本島北部各地でも確認されており、構築場所が沢周辺で共通しているが、（今回調査地の）近隣一帯では他に窯を認めずに単基である点で、やや様相は異なる。

2.2. 基本層序 層序は計7枚を認め（燃焼室は6枚）、構築・操業段階～廃棄以降と比較的明瞭な堆積過程が窺える（写真 5.3.115）。このうち、2層は崩壊した天井部で、3～5層が操業期間内の堆積層、6層は窯の構築時に貼床された粘土の可能性も考えられる。

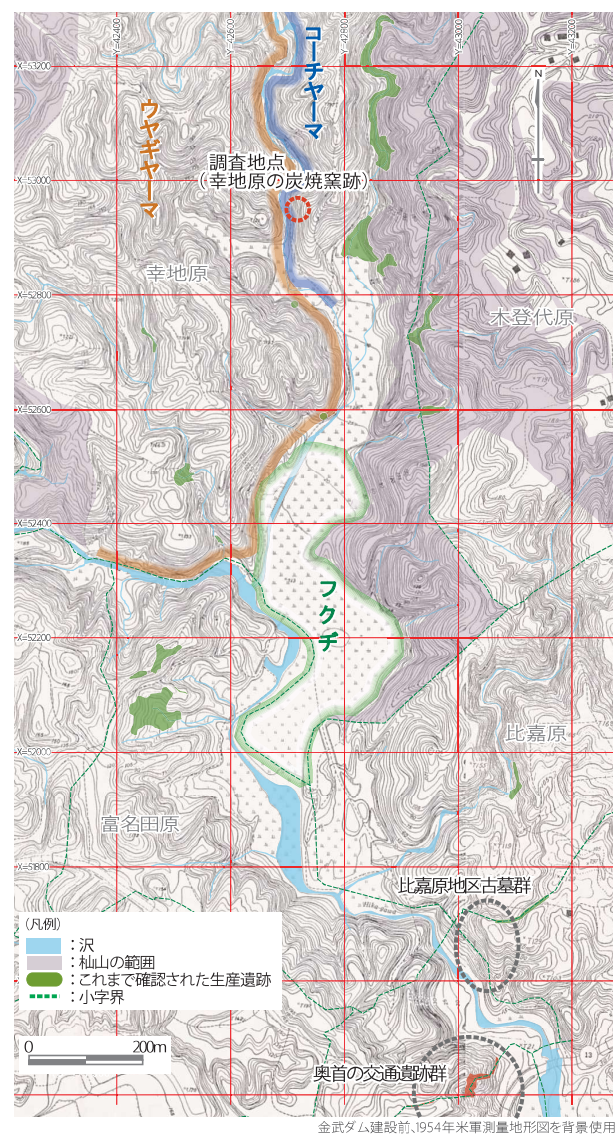


図 5.1 億首川上流域生産遺跡群 分布状況

* 池原 隆「並里の地名」並里区誌編纂委員会（編）『並里区誌 戦前編』並里区事務所 1998 年

** 谷や沢沿いの低地を指す方言での名称、サークともいう。

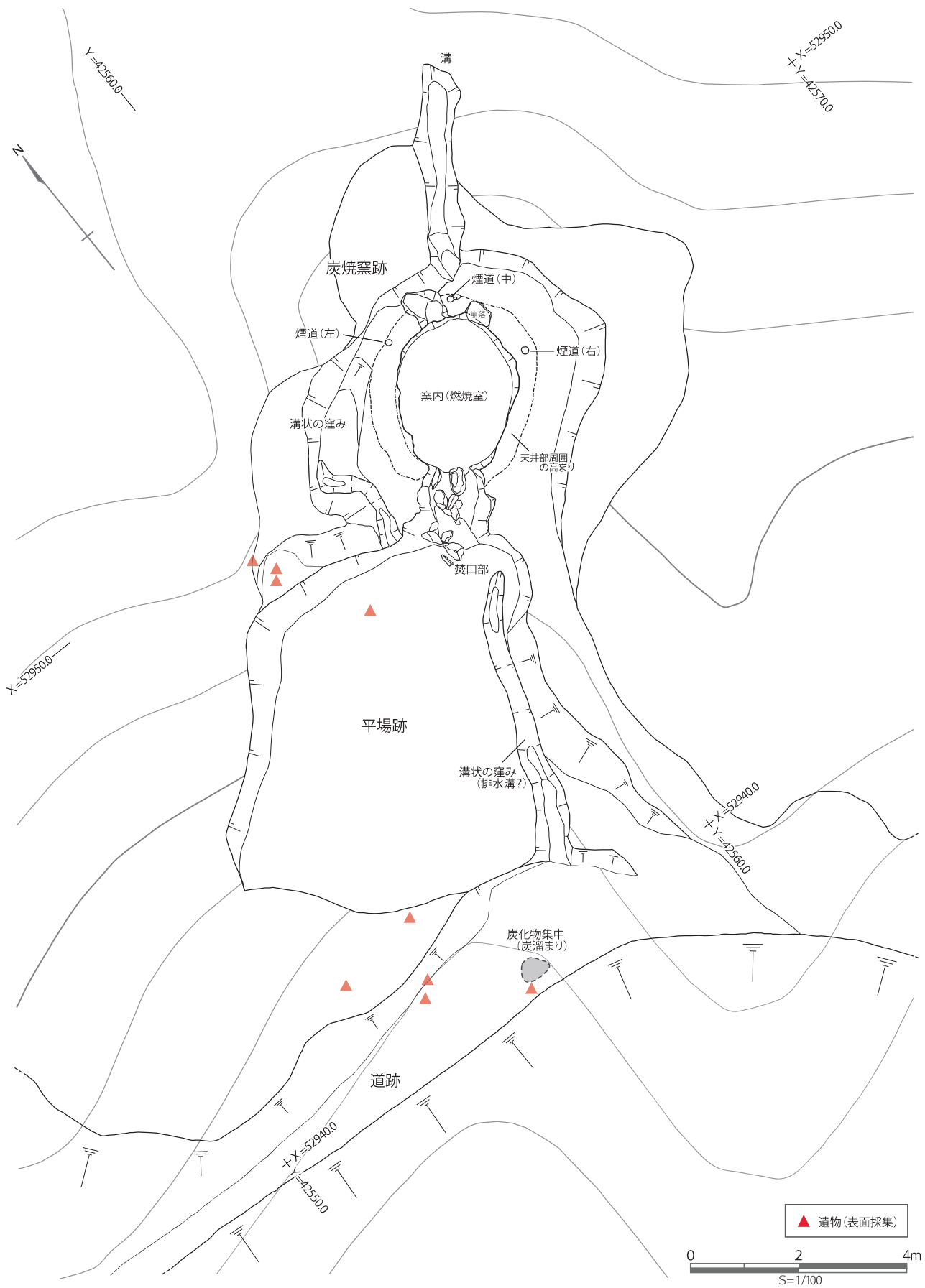


図 5.2 幸地原の炭焼窯跡（窯及び平場跡）

第3節 遺構及び出土遺物

3.1. 遺構詳細 窯が廃絶後、天井部及び焚口の一部分が崩壊し時間が経過した状態で確認したが残存状態は概ね良好であった。燃烧室（炭化室）の周囲には馬蹄形状にめぐる平坦な段が付され、窯を覆う上部構造物（覆い屋根）が乗っていたと推される。付随施設として焚口前方には平坦に整地された約 6.7×4.7 mの作業場とみられる平場があり、眼下の沢筋に降る道跡も残る。窯周囲の段部及び作業場には排水路とみられる溝状の落ち込みも残る。

窯自体は緩斜面を切土及び盛土し構築されている。天井は燃烧室周囲に残る立ち上がりから円形ドーム状だったと推定される。燃烧室は焚口—正面奥壁が長軸となる楕円形状の平面観を呈する（図5.2）。煙道は焚口から向かって奥壁中央とその左右の計3箇所にて設けられ、各々に連続する溝が床に構築されている。煙道は内壁を溝状に掘削した後、手前（内壁面側）に扁平な礫を粘土で固定しながら積み上げて構築している。礫は窯周辺で調達可能な粘板岩角礫を用いている。

煙道に繋がる床面に構築された溝は、燃烧室中央で交わり焚口へと延びる。排水を意図してか、溝はすべて焚口方向に向かって勾配がつけられ、中央を走る溝に集約される構造となっている（左右の溝より深い）。なお、幸地原の炭焼窯の燃烧室規模と類似する大宜見村大保川上流域事例（2号炭焼窯）では、溝上部の蓋石配置が確認されているが、今回の調査対象では認められない等の相違点もある。燃烧室床面を走る溝が窯外にどのように続くかは確認が適わなかった。

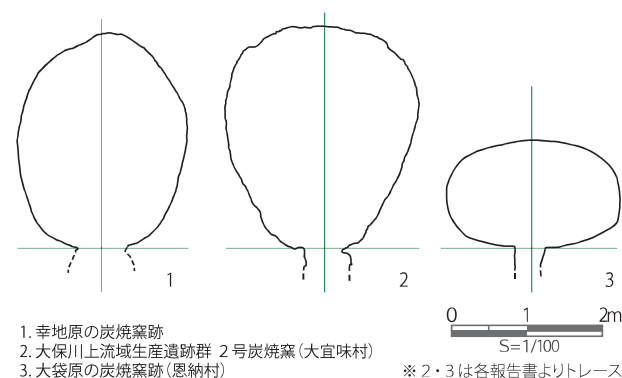
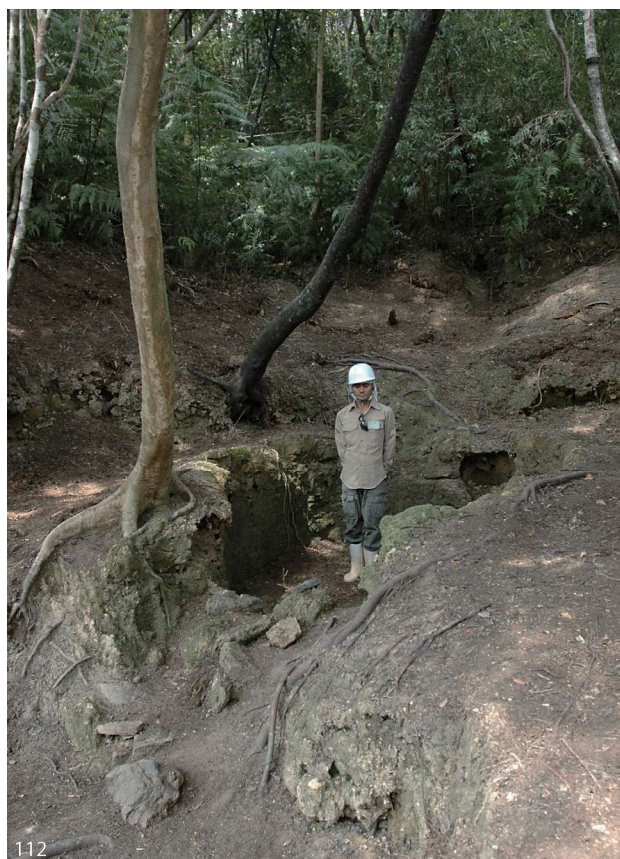


図5.3 県内類似資料との燃烧室規模比較

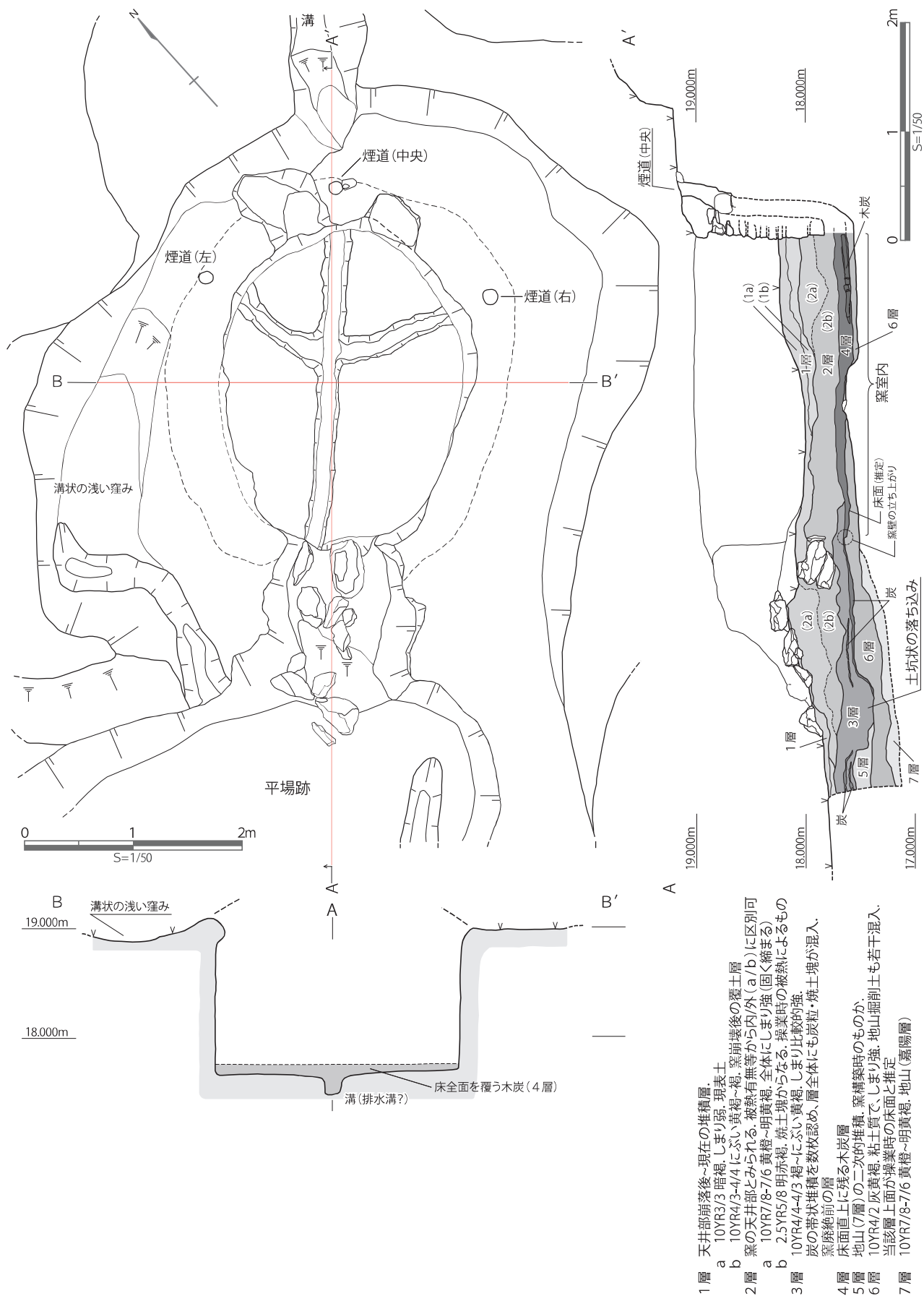


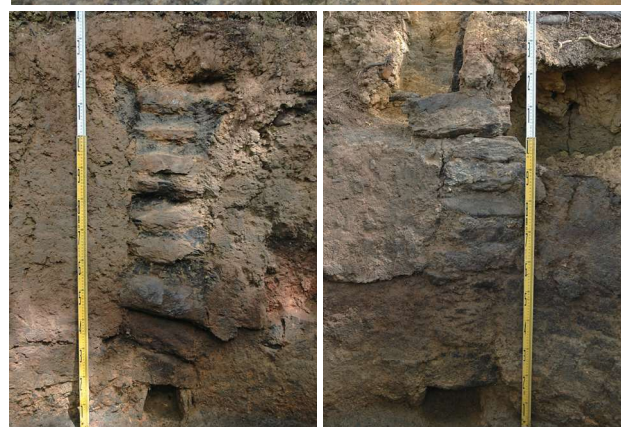
112 幸地原の炭焼窯跡現況（予備調査時）



113 炭焼窯周辺の立地近景（フクジは写真右側の方向）
114 発掘調査作業風景

写真5.2 遺跡立地・確認状況及び調査風景





115 燃烧室内堆積土 半截状況
117 床直上検出の木炭
119 燃烧室内完掘状況

116 床一面に残る木炭層（4層）
118 燃烧室内 煙道検出状況
120 煙道個別
左上：左側煙道、右上：奥壁中央部の煙道、左下：右側煙道

写真 5.3 遺構検出状況

3.2. 出土遺物 平場跡周辺で本土産磁器（印判染付）やガラス瓶を表面採集したのみで、窯内では作業時の木炭を検出したのみである。採集品に限られるため窯構築・作業時期の推定するに慎重を要するが、近代～

昭和戦前期と推定される。過去の聴き取り調査記録には、戦前（昭和10年頃）、調査地点に近い上ゴーチで炭焼きが行った者がいたとの記載がみられ、今回調査地の可能性もあるが、上記の推定時期とも矛盾はない。

表 5.1 幸地原の炭焼窯跡 出土遺物観察表

図版番号	種類	出土地点 層	器種 残存部位	法量	観察所見	備考等
図 5.5 49	本土産磁器 印判染付	平場跡 表面採集 表土層	碗 口縁～ 底部	口径 13.3 器高 6.4 底径 4.4	スンカンマカイ。腰がやや膨らむ端反碗。素地は灰白色。見込及び高台を重ね焼きのための釉剥ぎ、5個の目跡あり。	口縁下及び腰部に点描充填による鋸歯文が向き合い、菱形の窓絵（空白）に花文。口縁内にも同様な鋸歯文に花文を巡らし、見込みに圈線、中央（茶溜り）に花文。
図 5.5 50	本土産磁器 印判染付	平場跡 表面採集 表土層	碗 口縁～ 底部	口径 13.6 器高 6.4 底径 4.4	スンカンマカイ。腰がやや膨らむ端反碗。素地は灰白色。見込及び高台を重ね焼きのための釉剥ぎ、5個の目跡あり。	口縁下及び腰部に点描充填による鋸歯文が向き合い、菱形の窓絵（空白）に花文。口縁内にも同様な鋸歯文に花文を巡らし、見込みに圈線、中央（茶溜り）に花文。
図 5.5 51	本土産磁器 印判染付	平場跡 表面採集 表土層	碗 口縁～ 底部	口径 13.8 器高 6.8 底径 4.8	スンカンマカイ。腰がやや膨らむ端反碗。素地は灰白色。見込及び高台を重ね焼きのための釉剥ぎ、5個の目跡あり。	口縁下及び腰部に点描充填による鋸歯文が向き合い、菱形の窓絵（空白）に花文。口縁内にも同様な鋸歯文に花文を巡らし、見込みに圈線、中央（茶溜り）に花文。
図 5.5 52	本土産磁器 印判染付	平場跡 表面採集 表土層	小碗 口縁～ 底部	口径 10.8 器高 5.4 底径 3.5	御飯茶碗。白色の素地に黒色微粒が混入。光沢ある透明釉で曇付のみ無釉。	外面2箇所型紙吹付けによる茄子の文様。
図 5.5 53	本土産磁器 印判染付	平場跡 表面採集 表土層	湯呑茶碗 口縁～ 底部	口径 8.1 器高 4.8 底径 3.3	腰が膨らみ、口縁まで直線的に立ち上がる。素地は灰白色。透明釉を全面施釉。	外面は腰～口縁の範囲に細かい縦溝と長短の点・縦線を組み合わせた文様構成。腰下～高台脇に数条の圈線。
図 5.5 54	本土産磁器 印判染付	平場跡 表面採集 表土層	湯呑茶碗 口縁～ 底部	口径 7.7 器高 4.5 底径 2.8	腰から口縁にかけ曲線的。素地は灰白色。透明釉を施すが、斑があり内面一部に露胎。	外面口縁～腰部に菱形の井桁文様を連続配置し、空白部に菱形構成の点文を充填。腰下～高台脇に数条の圈線。



図 5.5 幸地原の炭焼窯跡 出土遺物

第Ⅵ章 総括

今回の発掘調査成果及びこれに拠る現時点での遺跡の理解、今後の課題等を整理して総括としたい。

1. 奥首^{ウククビ}の交通遺跡群について

国頭方東海道跡をはじめとする交通遺跡群の最大の特徴は、“ウククビ(奥首)”の古地名にみる限定的な範囲において近世・近代～戦後現代の複数世代の道路変遷を通時的に概観できる点である。以下、遺跡の主たる帰属時期に沿って、国頭方東海道跡(宿道)、大正期村道跡、旧億首橋の順に整理する。

交通遺跡群のなかでも最古段階に位置づけられ、明治期の文献史料に「螺旋シテ下ル」「峻阪羊腸」と描写された国頭方東海道跡(宿道)について、予備調査(試掘調査)から推定される遺構残存範囲の全面検出を行った。その結果、台地縁辺部に舌状に露頭する石灰岩岩盤を路面利用した範囲(1区)及びこれに続く丘陵斜面の上方(2区)では、道路遺構の良好な残存状態を認めたが、斜面中腹～丘陵裾部の範囲(3・4区)では大正期村道期以降とみられる掘削等の影響で、道路遺構の輪郭も窺え得ない状態であった。

沖縄本島各地にみる過去の宿道確認事例と同様、路面構築に琉球石灰岩を多く用いる範囲は急な斜面地にほぼ限られていたことが遺構検出状況から推測される。遺構の良好な残存状態を認めた1区・2区において、先行掘削溝(断面観察トレンチ)から道路構造及びその構築過程の詳細を確認する事ができた。1区では露頭する石灰岩岩盤の形状を道路線形や路面に活かしながら、路幅^{インジク}確保や路面安定のための造成層、砕かれた細礫(石粉)による空隙充填や舗装等の構築手法も確認された。露頭岩盤を路面利用する状況から、當眞嗣一氏分類の「自然石をそのまま使用した」タイプに該当すると思われる*。

続く斜面地(2区)において、幅2.9m前後の範囲に帯状に検出された礫集中範囲も1区に続く道路遺構と推測される。一部に礫集中面の重畳も認めた(上位/下位礫集中面)。間層の存在、土層色調の差異等も認めるが、礫集中面の重畳は急勾配の箇所にはほぼ限られる検出状況から推察するに、上下の礫集中面における時期差はさほど開かず、道路補修等による蓋然性が高いと考える**。

丘陵斜面の中程に位置する3区でも連続的な遺構残存面を期待したが、宿道期の道路利用が途絶えて以後の土地利用に因るとみられる掘削の影響が全体に及んでおり、残存範囲は断片的なものであった。

一方、宿道西側地区で検出された溝状遺構^{わだち}について、ほぼ一定幅で並列する状況から轍跡とも考えられたが、なお疑問が残る所もあり性格は不詳である。

国頭方東海道跡で検出した道路遺構の帰属時期については、沖縄産陶器や本土産陶磁器等を得ているが、宿道構築以前に相当とする基本層序IV以下で遺物は得られず、構築年代上限に迫る成果を得ることは適わなかった。他方、出土遺物のなかに先史時代(沖縄貝塚時代)の所産とみられる石器(叩石類)、16～17世紀頃の中国産青磁碗を認めた。当該遺物を宿道通行者が持ち込んだとは考え難く、調査区を含む付近一帯に時期を遡る遺跡がかつて存在した可能性も示唆される。予備調査(試掘調査)並びに今回の本発掘調査でもこの点に留意したが、当該時期の遺物包含層を確認するには到らなかった。

宿道の次世代にあたる大正期村道跡では、村道整備時以後とみられる岩盤掘削面及びコーラルが敷かれた造成範囲を検出した。断面観察から岩盤を掘削後に路幅確保のため盛土造成され、コーラルが敷かれた過程が推測できる。帰属時期は村道整備後と推されるが、岩盤掘削箇所の床面高とコーラル敷き検出面に明確な高低差もみられ、両者を同時期の路面と解釈するには慎重を期す必要も感じる。

なお、本調査では対岸に残る昭和戦前期アーチ橋(通称 旧億首橋)の現況記録もあわせて実施した。昭和戦前期の橋梁建築技術を窺える実資料として、そして沖縄戦の記憶を直接留める戦争遺跡としても今後の保護活用が望まれる。

2. 億首川流域古墓群比嘉原地区^{ヒジャ ウンバ}について

交通遺跡群の対岸、小字比嘉原・宇武場原に跨る丘陵斜面地に分布する古墓8基(H-01～08号墓)を対象に記録保存を実施した。なお、調査対象の墓は、現況地籍図にみる墓地とは重ならない。

構築部材に用いられたコンクリート材やモルタル、墓室内外で得られた専用蔵骨器や供献品にみる近現代磁器等から、推測される墓の構築・使用年代は、

* 當眞嗣一「石畳道」沖縄県教育委員会編『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅱ-国頭・中頭方西海道(Ⅰ)・弁ヶ嶽参詣道-』1983年

** 奥野彦六郎著『南島村内法』至言社1977年に収録される金武間切村内法に、宿道補修に関する記載がある。参考までに該箇所を引用する。
「…第十九條 宿道並脇道ノ儀破リ次第則々可致修甫候及大破候テハ却テ手隙ノ費可及大分ニ候尤モ破所有之時ハ則ニ可致修甫候事…」

時期的に遡っても近代～昭和戦前期、新しいものでは本土復帰後の構築とみられるものもある。大半が墓室内の人骨は移され、周辺に破棄された蔵骨器等が散布する状態であったが、調査区の北側、丘陵尾根先端部に隣接して分布するH-06～08号墓は、蔵骨器が収納された状態で確認された。個人墓と推される墓室規模や構築部材等の構造的特徴、人骨の代用に枝サンゴを納めた埋葬状況、蔵骨器等の共通要素を多く認める事ができ、帰属時期は、戦後とみられる。当該地区の墓群は造墓時期が比較的新しいものも含むが、露頭した石灰岩岩盤の岩陰部分を利用する点で共通する。つまり、当該地域（億首川周辺）においては戦後現代に到る時期まで伝統的な造墓形態（岩陰墓や掘込墓）が存在した状況が窺える。これは調査地点を含む億首川周辺の土地利用実態を通時的に概観する上で重要な成果である。

今回調査対象となった比嘉原地区をはじめ、億首川周辺には「ナグスク」「ミーチェ」の古地名を持つ小字宮城原・田慶志原の丘陵崖面一帯など、特に下流兩岸に控える丘陵台地斜面において露頭する石灰岩岩盤を利用した古墓群が複数存在する（億首川流域古墓群）。石灰岩岩盤の岩陰や窪みをそのまま利用または加工した墓（岩陰墓・掘込墓）が主だが、地区を違えて構築箇所の標高値（海拔高数値）に近いものも幾つか認める。あるいは億首川兩岸の台地崖面・斜面地に刻まれた複数のノッチを墓に利用していた可能性も示唆される。

今回得た調査成果は、億首川流域古墓群の全体からみれば断片的な調査記録に過ぎない。当該地域における墓域の形成は時期的にいつ頃まで遡るか（初現及び時期幅の問題）、前述の墓構築におけるノッチ利用の可能性等、億首川周辺古墓群をめぐる検証を要する課題については、まだ途上段階である墓個々の分布状況（位置・概数）や残存状態等に関する基礎調査もあわせ、さらに調査情報を蓄積していくことが必要である。

3. 幸地原の炭焼窯跡について

億首川上流域（現金武ダム貯水池周辺）一帯では、近代～昭和戦前期の山林における生産・生業活動の痕跡である生産遺跡が複数確認されている（億首川上流域生産遺跡群）。沢及びその周辺地形を利用した耕地跡（水田跡・畑跡）が主であり、幸地原の炭

焼窯は上流域における木炭生産を直接証左する現在唯一の事例である。半裁による断面観察で計6枚に分層された窯内（燃焼室）の堆積土層は、築窯段階から操業期、終期後の崩壊・埋没過程まで層位的に検証が可能な状態で、掘削後に粘土貼床された燃焼室の構築過程も窺えた。煙道口（排煙口）に流れ込んだ水を排出するためとみられる床面の溝は、中央―焚口方向へと勾配が付されるが、上部に蓋石は設置されず溝内は炭が充満した状態であった。

近年、沖縄本島北部でも近代生産遺跡調査事例は増えており、今回、大宜味村大保川上流域・恩納村大袋原山中で確認された炭焼窯跡と燃焼室規模の比較検討を行った（第5章図5.3）。大保川上流域生産遺跡群の事例と平面規模に近いが、燃焼室の平面形状や床面の溝配置等に若干の差異も認め、県内の炭焼窯調査事例に貴重な追加事例となった。

調査地点付近で他に窯跡の残存は認められず、億首川上流一帯でも今回の地点以外に未見である点も留意される。昭和戦前期、調査地点付近（通称上ゴーチ）^{ウィー}に炭焼小屋が存在したと地元字誌に記載をみる^{やんばるせん}が、調査後の聴き取り調査でも当該地域の木炭生産に関する情報には殆ど接し得なかった。かつて億首川上流のヤマから得た各種林産物がウククビ（奥首）のヤマクモー・フナヤに集積され、山原船で本島中南部に輸出された様子が口碑に伝わるが^{***}、輸出品目に木炭が含まれていたかは定かではない。木炭が生産された事実は疑いないが、窯の分布状況から生産規模・操業期間は小さく短いものであったように考えられる。当該地域における諸生産活動については、予備調査を含む現地調査の実施範囲もまだ局所的で調査情報・資料情報も断片的であるため、今後も基礎的調査を継続する必要がある。

おわりに 今回、記録保存対象となった、「奥首の交通遺跡群」「億首川流域古墓群比嘉原地区」並びに「幸地原の炭焼窯跡」について、発掘調査成果の要約及び現時点での遺跡理解、そして今後の課題等を述べてきた。今回得られた調査情報・調査記録は、「交通」・「墓」・「生産活動」をめぐる億首川と地域の先人達との関わり、その土地利用実態や生活誌が窺える内容であり、億首川周辺地域に限らず、金武町、そして本島北部地域（通称やんばる）の歴史的文化的環境を考察する上でも重要な成果と思われる。

*** 億首川には林材の加工・集積拠点とみられるヤマクモー、船への積荷場所であるフナヤが数箇所あったと伝わる（池原 1998・2010）。

宿道や村道が通るウククビ（奥首）にもヤマクモーとフナヤがあり、満潮時にはこの辺りまで遡航してきたという。

なお、山原船とは、昭和戦前期まで那覇や与那原など本島中南部と、今帰仁村運天や国頭村奥などの本島北部、いわゆる山原地方とを往来した交易船のこと。

引用・参考文献

国・沖縄県刊行物（刊行年順記載）

- 琉球政府編『沖縄県史 20 ―沖縄県統計集成―』1967 年
「沖縄県森林視察復命書」（琉球政府編『沖縄県史 第 21 巻資料編 11 ―旧慣調査資料―』琉球政府 1968 年）所収
「琉球行日誌」（沖縄県沖縄史料編集所 編『沖縄県史料 近代 3 ―尾崎三良・岩村通俊沖縄関係史料―』沖縄県教育委員会 1980 年）所収
「琉球国高究帳」（沖縄県沖縄史料編集所 編『沖縄県史料 前近代 1 ―首里王府仕置―』沖縄県教育委員会 1981 年）所収
「沖縄本島巡回日誌」（沖縄県沖縄史料編集所 編『沖縄県史料 近代 4 ―上杉県令沖縄関係資料―』沖縄県教育委員会 1983 年）所収
沖縄県教育委員会 編『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅵ ―国頭方東海道・他―』1989 年
「上り絵図郷村帳」（沖縄県教育委員会 編『琉球国絵図史料集 第二集―元禄国絵図及び関連史料―』1993 年）所収
沖縄県教育委員会 編『石嶺坂石畳道―沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書（4）―』沖縄県文化財調査報告書第 80 集 1986 年
沖縄県教育委員会 編『湧田古窯跡（Ⅰ）―県庁舎行政棟建設に係る発掘調査―』沖縄県文化財調査報告書第 111 集 1993 年
沖縄県教育委員会 編『沖縄県史 各論編第二巻―考古―』2003 年
沖縄県立埋蔵文化財センター 編『沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地の遺跡（Ⅰ）―埋蔵文化財予備調査（表面踏査）報告―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 31 集 2005 年
沖縄県立埋蔵文化財センター 編『沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地の遺跡（Ⅱ）―埋蔵文化財予備調査（試掘・確認調査）報告―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 36 集 2006 年
沖縄県立埋蔵文化財センター 編『基地内文化財Ⅳ ―平成 15・16 年度基地内埋蔵文化財分布調査概要―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 38 集 2006 年
沖縄総合事務局北部ダム事務所 編『億首ダムの計画概要』2005 年
沖縄県『億首川水系河川整備計画』2008 年

論文等（執筆者名五十音順）

- 新垣 力・瀬戸哲也「沖縄における 14 世紀～16 世紀の中国産白磁の再整理 ―付.14～16 世紀の青磁の様相整理メモ―」『紀要 沖縄埋文研究 3』沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 年
池田栄史・津波古聡「灰釉碗の話」『沖縄県立博物館紀要』第 17 号 沖縄県立博物館 1991 年）所収
池原 隆「並里の地名」並里区誌編纂委員会 編『並里区誌 戦前編』並里区事務所 1998 年
池原 隆「億首川周辺と与那原の海上交通」『町内埋蔵文化財予備調査報告書―億首川周辺（平成 18～20 年度）―』金武町の歴史と文化第 4 集 金武町教育委員会 2010 年
柿田富造「焼酎瓶・硫酸瓶の変換 ―常滑焼を中心にし

て―』『産業遺産研究』第 7 号 中部産業遺産研究会 2000 年

崎原恒寿「恩納村の炭焼窯」『恩納村博物館紀要』恩納村博物館

田畑直彦「小野田皿山の硫酸瓶と石見焼・堀越焼の大甕づくり―硫酸瓶の研究①―」『山口大学埋蔵文化財資料館年報―平成 18 年度―』山口大学埋蔵文化財資料館 2010 年

島袋伸三「金武（金武・並里）の自然」並里区誌編纂委員会 編『並里区誌 戦前編』並里区事務所 1998 年

瀬戸哲也・仁王浩司・玉城 靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志「沖縄における貿易陶磁研究 ―14～16 世紀を中心に―」『紀要 沖縄埋文研究 5』沖縄県立埋蔵文化財センター 2008 年

當眞嗣一「石畳道」沖縄県教育委員会 編『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅱ―国頭・中頭方西海道（Ⅰ）・弁ヶ嶽参詣道―』緑林堂出版 1983 年

宮城弘樹「いわゆるスンカンマカイについて」『壺屋焼物博物館紀要』第 3 号 那覇市立壺屋焼物博物館 2002 年

市町村刊行報告書・地域史誌関係（地域名五十音順）

- 糸満市史編集委員会 編『糸満市史 ―資料編 12 民俗資料―』糸満市役所 1991 年
浦添市教育委員会 編『浦添ようどれⅡ 瓦溜り遺構編 ―史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査―』2005 年
うるま市教育委員会 編『^{うふたばら}大田坂一具志川沖縄線改良工事に伴う緊急発掘調査―』うるま市文化財調査報告書第 10 集 2010 年
大宜味村教育委員会 編『大保川上流域の生産遺跡群 ―大保ダム建設事業に伴う緊急発掘調査報告―』大宜味村文化財調査報告書第 6 集 2009 年
沖縄市教育委員会 編『屋取集落に生きる ―池原上田原・仕明座原遺跡発掘調査報告書―』沖縄市文化財調査報告書第 34 集 2008 年
沖縄県地域史協議会 編『シンポジウム 南島の墓 沖縄の葬制・墓制』沖縄出版 1989 年
恩納村教育委員会 編『沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地の遺跡 ―埋蔵文化財予備調査及び緊急発掘調査報告―』恩納村文化財調査報告書第 7 集 2008 年
宜野湾市教育委員会 編『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 平成 15～18 年度基地内遺跡ほか発掘調査事業―普天間飛行場基地内―』宜野湾市文化財調査報告書第 39 集 2007 年
宜野湾市教育委員会 編『宇地泊西原丘陵古墓群―詳細分布調査・個人墓地造成に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書―』宜野湾市文化財調査報告書第 42 集 2008 年
国頭郡教育会 編『沖縄県国頭郡志』1919 年
名護市史編さん委員会 編『名護市史本編・9 民俗Ⅰ・民俗誌』名護市役所 2001 年
名護市教育委員会 編『クスノキ製造 ―久志大川ダム建設に伴う久志大川上流域生産遺跡緊急発掘調査報告書―』名護市文化財調査報告書 16 2004 年
那覇市教育委員会 編『首里崎山古墓群―首里崎山公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告―』那覇市文化財調査報告書第 47 集 2001 年
那覇市教育委員会 編『銘苅古墓群（Ⅶ）―天久公園整

備事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅶー』那覇市文化財調査報告書第73集 2007年
羽地大川一山の生活誌ー調査編集委員会編『羽地大川一山の生活誌ー』北部ダム事務所・名護市 1996年
やんばる国道変遷誌編集委員会編『やんばる国道物語』内閣府沖縄総合事務局北部国道事務所 2005年
与那原町史編集委員会編『与那原町史 序説ーむかし与那原ー』与那原町役場 1988年
伊波普猷・東恩納寛惇・横山 重 編『琉球国旧記』『琉球史料叢書』第三巻 1942年

単行本（編著者名五十音順）

池野 茂『琉球山原船水運の展開』ロマン書房 1994年
奥野彦六郎『南島村内法』至言社 1977年
小野武夫編『近世地方経済史料 第十巻』吉川弘文館 1958年
崎浜秀明『蔡温全集』本邦書籍 1984年
笹森儀助「南島探験」『日本庶民生活史料集成 第一巻ー探検・紀行・地誌（南島篇）ー』三一書房 1968年
仲田邦彦『沖縄県の地理』編集工房東洋企画 2009年
名嘉真宜勝『沖縄の人生儀礼と墓』沖縄文化社 1999年
仲間勇栄『沖縄林野制度利用史研究 一山に刻まれた歴史像を求めてー』ひるぎ社 1984年
仲吉朝助『杣山制度論』1952年
原田禹雄『徐葆光 中山伝信録 ー新訳注版ー』榕樹書林 1999年

金武町関係（発行年順）

金武町教育委員会編『金武町の遺跡ー遺跡詳細分布調査報告ー』金武町文化財調査報告書第1集 1990年
金武町教育委員会編『金武町億首川マングローブ調査報告書』1993年
金武区誌編集委員会編『金武区誌 上巻』金武区事務所 1994年
並里区誌編纂室編『並里区誌資料編ー戦前新聞集成ー』並里区事務所 1995年
並里区誌編纂委員会編『並里区誌 戦前編』並里区事務所 1998年

金武町教育委員会編『金武町の井泉ー水をめぐる人々のくらしー』金武町文化財調査報告書第2集 2003年
金武町役場企画課編『第4次金武町総合計画ー基本構想ー』金武町役場 2006年
金武町役場企画課編『水の恵みあふれる町 金武町ー2007町勢要覧ー』金武町役場 2007年
金武町役場企画課編『平成19年度版 統計きんー第6号ー』金武町役場 2008年
金武町教育委員会編『町内埋蔵文化財予備調査報告書ー億首川周辺（平成18～20年度）ー』金武町の歴史と文化第4集 2010年

展示会図録／パンフレット類（刊行年順）

那覇市立壺屋焼物博物館編『陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア』1998年
那覇市立壺屋焼物博物館編『那覇市立壺屋焼物博物館企画展 銘苅古墓群ー蘇った先祖の眠る大地ー』2005年
沖縄県立博物館・美術館編『博物館企画展 ずしがめの世界』2008年

事典類（刊行年順）

『沖縄大百科事典』（上・中・下巻）沖縄タイムス社 1983年
『角川日本地名辞典 47 沖縄県』角川書店 1986年
下中直人編『増補 やきもの事典』平凡社 2000年
『沖縄県の地名 - 日本歴史地名体系 48-』平凡社 2002年

なお、本報告書で扱った遺跡に関する発掘調査速報・概要報告に下記の文献がある。

金武町教育委員会編『宿道（国頭方東海道）発掘調査現場一般公開』（一般公開配布小冊子）2008年
安座間充「近世～近代遺跡の調査事例ー金武町・億首川流域の交通遺跡群，生産遺跡群ー」『考古学はどのように遺跡を掘るかー考古学の調査手法とその成果ー』（沖縄考古学会 2010年度研究発表会資料集）沖縄考古学会 2010年

報告書抄録

ふりがな		うくくびのこうつういせきぐん・おくくびがわりゅういきこぼぐん ひじゃばるちく・こうちばるのすみやきがまあと						
書名		ウククビ 奥首の交通遺跡群・億首川流域古墓群比嘉原地区・幸地原の炭焼窯跡						
副書名		億首ダム建設事業（本体工事区域）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次		—						
シリーズ名		金武町の歴史と文化						
シリーズ番号		第5集						
編著者名		安座間 充						
発行機関		金武町教育委員会						
所在地		〒 904-1201 沖縄県国頭郡金武町字金武 7758 番地（TEL：098-968-8996）						
発行年月日		2011 年（平成 23 年） 3 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うくくびの こうつういせきぐん 奥首の交通遺跡群 (国頭方東海道跡・ たいしやう き せんがうあと 大正期村道跡・ きゆうおくくびし 旧億首橋)	あざ きん 字金武 こあざ おくくびばる 小字奥首原	47314	—	26° 27′ 48″	127° 55′ 53″	2007/04/21 ～07/07/31	約 1,550㎡	ダム建設 (本体工事)
おくくびがわりゅういき こぼぐん 億首川流域古墓群 ひじゃばる ちく 比嘉原地区	あざ きん 字金武 こあざ ひじゃばる 小字比嘉原 うん ぼる ・宇武場原	同上	—	26° 27′ 58″	127° 55′ 54″	2007/07/01 ～07/07/31 2008/03/04 ～08/03/27	約 900㎡	
こうちばる の すみやきがまあと 幸地原の炭焼窯跡	あざ きん 字金武 こあざ こうちばる 小字幸地原	同上	—	26° 28′ 38″	127° 55′ 37″	2008/09/04 ～08/09/15	約 170㎡	
所収遺跡名	遺跡種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
ウククビ 奥首の交通遺跡群 (国頭方東海道跡・ 大正期村道跡・ 旧億首橋)	交通遺跡	近世～ 近代	道路遺構・礫集中面 (近世～明治、 大正～昭和戦前期)、 溝状遺構（時期不詳）、 岩陰墓 1 基		沖縄産無釉・施釉陶器、 本土産施釉陶器（硫酸 瓶）・本土産近代磁器、 金属製品（煙管雁首・ 蹄鉄等）、石器		近世・近代～昭和戦前期 各時代の道路変遷が窺 える交通遺構群を検出。	
億首川流域古墓群 比嘉原地区	墓	近現代	岩陰墓・掘込墓 計 8 基		専用蔵骨器、沖縄産無 釉・施釉陶器、本土産 近代磁器、ガラス製品 等		露頭石灰岩岩盤が多い 当該地の地形的特徴が 反映した墓群を検出。	
幸地原の炭焼窯跡	生産遺跡	近代	炭焼窯跡 1 基		本土産近代磁器（印判 染付）、炭化物 等		窯構築～操業及び廃棄 過程が窺える埋没状態 で検出。	
要 約	本書は、億首ダム建設事業（本体工事区域）に伴う遺跡発掘調査成果を収録したものである。 奥首の交通遺跡群では、明治期文献の描写記載と合致する数少ない事例でもある国頭方東海道跡（宿道）について、道路遺構の全体的検出及び構造の確認をおこなった。構築年代上限に迫ることは適わなかったが、当該地形を利用した構築過程を詳細に記録することができた。宿道終期以後の大正期村道跡及び旧億首橋とあわせて、ウククビ（奥首）と呼ばれる限定的な範囲に複数世代の道路変遷を通時的に概観できる点は特筆される。交通遺跡群の対岸に位置する比嘉原地区古墓群では、露頭石灰岩岩盤の形状を利用する墓形態・構築手法が戦後現代に到る時期まで存続する状況を確認した。億首川上流域生産遺跡群の一つである幸地原の炭焼窯跡は、一部崩壊していたが、窯の構築段階から操業期を経て放棄・埋没する過程が層位的に窺える良好な状態であった。 今回の発掘調査によって、交通・葬墓・生産活動をめぐる億首川周辺と先人の関わりや土地利用実態を窺い知ることができ、当町及び本島北部地域の歴史的環境を理解する上でも貴重な調査記録となった。							

編集後記

振り返れば非常に時間に追われていた印象が残る。現場調査～資料整理・報告書作成の諸工程を限られた体制・時間で行い、現地保存の代償に得られた発掘調査成果を遺漏なく掲載するように努めたが、結果的に検証が十分と言い難い所もあると思う。担当者の責である。

今回、予備調査（開発区域詳細）における遺跡確認後、周知活動及び現地保存のための保護協議、結果やむなく記録保存措置となり本格的な発掘調査に到ったが、この一連の過程は当町の埋蔵文化財保護行政が初めて経験するものであった。調査地一帯の景観は今後大きく変貌するが、事業者と文化財保護側双方が対象遺跡の重要性を共有認識し協議を重ねた結果、村道跡の一部及び旧億首橋は保存が決定した。一般公開等を通じ、地域の住民が郷土に埋もれた遺跡に接した事も大きな成果と思う。また、国頭方東海道跡（宿道）についても、堤体完成後の周辺整備計画で再現し活用を図る方向で現在検討が続いている。

今回の発掘調査が当町における埋蔵文化財保護の次のステップへの足掛かりとなる事を願う。

金武町の歴史と文化 第5集

ウククビ
奥首の交通遺跡群
億首川流域古墓群比嘉原地区
幸地原の炭焼窯跡

—億首ダム建設事業（本体工事区域）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年 2011（平成23）年 3月

編集・発行 金武町教育委員会

〒904-1201 沖縄県国頭郡金武町字金武 7758 番地
TEL (098) 968-8996 〈社会教育課〉

印刷 株式会社沖産業

〒901-0305 沖縄県宜野湾市伊佐2丁目1番1号
TEL (098) 898-2191